小・中学校

東京都道徳教育郷土資料集

（第３集）

（町田市：谷戸田の風景）

（東久留米市：南沢湧水付近）

平成21年3月

東京都教育委員会

はじめに

東京都教育委員会では、平成十一年度から区市町村教育委員会と連携して、「道徳授業地区公開講座」を実施してまいりました。この公開講座の趣旨は、次のとおりです。

①意見交換を通して、家庭・学校・地域社会が一体となった道徳教育を推進する。

②道徳の授業の質を高め、道徳の時間の活性化を図る。

③道徳の授業を公開することにより、開かれた学校教育を推進する。

この公開講座は、平成十四年度からは都内すべての公立小・中学校で実施され、平成十七年度からは都内すべての都立中高一貫教育校や特別支援学校においても実施されております。また、平成十五年度には公開講座の一層の充実を目的とした推進委員会が設置されました。

このように今日まで、家庭や地域社会と一体となって推進する心の教育の普及に努めてきたところであります。

今後、より一層、道徳教育の要（かなめ）である「道徳の時間」の特質を生かした指導の充実が不可欠であることは言うまでもありません。

こうした道徳の時間の目標の達成を図り、児童・生徒に充実感をもたらすような生き生きとした指導を進めるためには、道徳の時間の資料となる魅力的な教材を多様に開発し、その効果的な活用に努めることが大切です。

本書は、都内公立小・中学校等のすべての児童・生徒に充実した道徳教育を推進するとともに、児童・生徒が日常の体験を想起し実感を深めやすい地域教材を資料として開発し、郷土や国に対する愛着や誇りをはぐくむために、道徳の時間で活用する「東京を題材とした読み物資料集」を活用例とともに編集したものです。

各学校においては、第１集（平成十七年度発行）、第２集（平成十八年度発行）及び本書第３集を活用し、道徳の時間の一層の充実が図られますよう期待しております。

終わりになりますが、本書の編集に当たられた道徳授業地区公開講座推進委員会の皆様、資料提供をしてくださいました関係者の皆様に厚く御礼を申しあげます。

平成二十一年三月

東京都教育委員会教育長

大　原　正　行

はじめに

第一章　郷土資料

小学校低学年用

一　木のおいしゃさん（立川市）……… 2
二　せせらぎのみち（国立市）……… 8
三　森のごちそう（三鷹市）……… 14
四　へびさん　よろしく（清瀬市）……… 20

小学校中学年用

一　むかしむかし柿の木坂で（目黒区）……… 24
二　内藤新宿（新宿区）……… 28
三　練馬の名産品（練馬区）……… 32
四　わき水の町　東久留米（東久留米市）……… 36
五　日本の国ぎ（港区）……… 40

小学校高学年用

一　オオタカのすむ里（町田市）……… 44
二　おもうわよ（青ヶ島村）……… 50
三　よみがえれ　ふるさと三宅島（三宅村）……… 54
四　小金井桜（小金井市）……… 60
五　だるまさん　だるまさん（西多摩郡瑞穂町）……… 66

中学校用

一　小石川上水をつくった人
　　―大久保藤五郎（文京区）……… 70
二　大きさとやさしさ（足立区）……… 76
三　浅間山の魅力（府中市）……… 82
四　花火大会（多摩市）……… 88

第二章　郷土資料の活用

小学校低学年用

一　木のおいしゃさん　3―(2)　……96
二　せせらぎのみち　3―(2)　……97
三　森のごちそう　4―(2)　……98
四　へびさん　よろしく　4―(5)　……99

小学校中学年用

一　むかしむかし柿の木坂で　2―(2)　……100
二　内藤新宿　4―(5)　……101
三　練馬の名産品　4―(5)　……102
四　わき水の町　東久留米　4―(5)　……103
五　日本の国ぎ　4―(6)　……104

小学校高学年用

一　オオタカのすむ里　3―(2)　……105
二　おもうわよ　4―(3)　……106
三　よみがえれ　ふるさと三宅島　4―(7)　……107
四　小金井桜　4―(7)　……108
五　だるまさん　だるまさん　4―(7)　……109

中学校用

一　小石川上水をつくった人
―大久保藤五郎　1―(4)　……110
二　大きさとやさしさ　2―(5)　……111
三　浅間山の魅力　3―(2)　……112
四　花火大会　4―(2)　……113

第一章　郷土資料

せいせき多摩川花火大会の会場付近

木のおいしゃさん　（立川市）

ぼくは、さくらの木。
立川にある　昭和記念公園という　大きな　こうえんにいます。
なかまが　いっぱい　いて、春に　みんなで　花を　さかせます。たくさんの　人が、ぼくたちを　みて、よろこんでくれます。

九月に、たいへんなことが　おきました。大きな　たいふうが　やってきて、つよい風が　ふいたのです。すると、ぼくの　えだが　おれてしまったのです。
「いたいよーっ、いたいよーっ。」
ぼくは、なきました。
しばらくすると、こうえんの　おじさんが　来てくれま

した。そして、すぐに　てあてを　してくれました。
でも、そのきずは　とても大きくて、きず口から　ばいきんが　入って　しまいました。
ぼくは、少しずつ　元気が　なくなっていきました。

ある日、ぼくを　しんぱいそうに　見ていた　こうえんの　おじさんが、木の　おいしゃさんを　つれて来ました。
木の　おいしゃさんは、ぼくを　じっと　見てから、そっと　きず口を　なでました。
それから、ぼくに　耳を　あてて、やさしく　言いました。
「とても　つらかったね。でも、もう　だいじょうぶ。おくすりを　つけてあげるからね。」
木の　おいしゃさんは、ぼくを　なでながら、きず口にくすりを　つけてくれました。

しばらくして　また　こうえんの　おじさんが、木の　おいしゃさんを　つれて来ました。

木の　おいしゃさんは、ぼくを　じっと　見てから、そっと　ぼくを　なでました。

それから、ぼくに　耳を　あてて、やさしく　言いました。

「だいぶ　よくなったね。えいようが　つけば、もっと　元気に　なるよ。」

木の　おいしゃさんと　こうえんの　おじさんは、ぼく

の　足もとを、シャベルで　ほりはじめました。
そして、えいようとなる　ひりょうを、たくさん　うめてくれました。
「早く、元気に　なるんだよ。」
ぼくは、ねっこから　たくさん　えいようを　すいました。
木の　おいしゃさんは、それから、まい日のように　来てくれました。いつも、ぼくに　話しかけてくれました。
木の　おいしゃさんは、ぼくの　たいせつな　人に　なりました。
しばらくすると、ぼくは、きずも　なおり、とても　元気に　なりました。
春が、きました。昭和記念公園に、たくさんの　人が　あ

つまりました。

ぼくたち　さくらの木は、思(おも)いきり　きれいな花を　さかせました。

木の　おいしゃさんが　にこにこしながら　手(て)を　ふって、ぼくの方(ほう)に　走(はし)って　きてくれるのが　見えました。

（武田　淳　作）

せせらぎのみち　（国立市）

ここは、せせらぎのみち。さんぽみち。小さな　川をはさんで、こんもりとした　みどりの　はやしが　ひろがります。

ある日、どんぐりくんは　ころんと　おちて、そのまま　ころころ　川の中。そこへ　ざりがにくんが　やってきて、いいました。

「おやおや、めずらしい　おきゃくさま。川の　中は　きにいって　もらえましたかな。」

どんぐりくんは、あたりを　みまわしてから、こう　いいました。

「水が　つめたいな。でも、きれいだね。」

「この川は、わき水を　あつめて　ながれて　いるからね。

じめんに　しみこんだ　あめが、ながい　じかんを　かけて、このがけの　下の方から　また　あふれだす。それが　わき水だよ。」

はなしている　ざりがにくんの　よこを、いろいろないきものが　とおりすぎて　いきました。みみを　すますと、水の　おとが、やさしく　ひびきます。

ふと　おひさまの　ひかりが、水の　中に　さしこんで、ざりがにくんと　どんぐりくんを　やわらかく　てらしました。どんぐりくんは、はじめて　みる　川の　中のせかいや、ざりがにくんの　はなしに、だんだん　わくわく　してきました。

「ねえ、どんぐりくん。こんどは、はやしの　はなしを　きかせて　おくれ。」

ざりがにくんが、いいました。

「ふゆには　はやしに　かぜが　ふくと、はっぱの　おと

が　かさかさ　そらじゅうに　ひびくんだよ。なつは、むしたちの　にぎやかな　パレードさ。あきは、どんぐりが　ころころ　ころころ。そろそろ　はやしは、あか、き、オレンジに　へんしんさ。」

水の　中しか　しらない　ざりがにくんも、わくわくしてきました。

「でもね。このあいだは、おばあちゃんと　おさんぽをしていた　まみちゃんが、とっても　ないたよ。」

「それは　また、どうして　ないたんだい。」

ざりがにくんは、みを　のりだして　たずねました。

「まみちゃんの　おきにいりの　どんぐりの　木（き）が　きられて、きりかぶだけに　なっちゃったのさ。」

「それは　また、どうして　きられたんだい。」

ざりがにくんは、ますます　みを　のりだして　たずねました。

「はやしを　まもる　ためさ。おひさまの　ひかりが　あたるように、木を　きることも　だいじなことらしい。きった　木を、まきや　すみに　したらしい。」

「きられちゃうなんて　かわいそう。」

ざりがにくんは　ふるえました。

「ところがね。ないている　まみちゃんに、おばあちゃんが　こう　いったんだ。」

「だいじょうぶ。はるに　なれば、きりかぶさんに　すてきなことが　おきるからね。きのう　ふった　あめも　がけに　しみこんで、いつか　わきみずに　なって　また　あえる。きりかぶさんにも　すてきなことが　きっと　おこるからね。さあ、なくのを　おやめ。」

ざりがにくんと　どんぐりくんは、すてきなことってなんなのか　じっと　かんがえて　いました。かんがえても　わからなくて、ふたりは　ねむくなりました。かたを　よ

せあい、目を　とじました。ふたりとも　川のこと　はやしのことを　おもいうかべて、目をつむったまま　にこにこがおに　なりました。

はるに　なったら、きりかぶから　また　あかちゃんえだがめを　だすことを、どんぐりくんも　ざりがにくんも　まみちゃんも、まだ　しりません。それを　しっている　おひさまが、にこにこと　せせらぎのさんぽみちを　あかるく　やさしく　てらして　おりました。

（橋本　ひろみ　作）

国立市　せせらぎのみち付近

森のごちそう

（三鷹市）

「おうい、ごちそうを　みつけたよ。」

ありの　ふうちゃんと　よっちゃんが、おいしそうなビスケットの　やまを　みつけました。ここは、みたかの森の　いのがしら池の　ほとり。なつの　あつい日。ミーンミーン、せみたちの　だいがっしょうが　きこえます。

なかまが、うれしそうに　あつまって　きました。

「よし、がんばって　すに　はこび　こむぞ！」

ふうちゃんは、大きな　ビスケットを、よいしょと　かつぎました。

よっちゃんは、なるべく　ちいさくて　かるいものをえらび、わざと　ゆっくりはこびました。つぎも　そのつぎも　そうしました。

ところが、ふうちゃんは、いつ　みても　大きな　もの

を　えらんでは、せっせと　うれしそうに　はこんで　いるでは　ありませんか。よっちゃんは、こう　おもいました。

（ふうちゃんは、なんで　たいへんな　ことを　するのかなあ……。）

日が、くれて　きました。池の　こいが　ふうちゃんにいいました。

「ふうちゃん、おもくて　たいへんだっただろう？」

森に　かえって　きた　からすも、いいました。

「一日（いちにち）、よく　がんばったね。えらいよ、ふうちゃん。」

「ありがとう。あのね、あかちゃんたちのぶん、みんなのぶんまで　がんばったんだ。」

「そうなんだ……。ふうちゃんには、いいことが　きっと　あるよ。」

からすは　そういうと、森の　中（なか）に　とんで　いきました。

た。

さて、それを　きいて　いた　よっちゃんは、ふうちゃんに　どんな　いいことが　あるのか、きになって　しかたが　ありません。

（ふうちゃんは、たくさん　ごほうびを　もらえるのかな。）

よっちゃんは、しんぱいになって　きました。

にしの　そらに、日が　しずみます。

「きょうは、ここまで。つづきは、あした。」

そんな　かけごえが　かかりました。

よるは、みんなで　ビスケットを　たべました。

よっちゃんは、くばられた　ビスケットの　りょうが、さっきから　きになっていました。ぼくのは、すくないのかな。ふうちゃんのは、おおいのかな。そんな　ことばかりを　かんがえて　いたので、ちっとも　おいしくありま

せん。

「きょうは、ふうちゃん　だいかつやく、とても　おもいのに、たくさん　はこんで　くれたね。」

みんなが、よろこんで　くれました。

ふうちゃんは、みんなのえがおの　中で、ビスケットをひとくち　かじりました。

「わあ、ほんとうに　おいしいね。からすくんの　いったとおりだ。いいことあったあ。」

よっちゃんは、そんな　ふうちゃんを　じっと　みていました。

つぎの日、よっちゃんは　ふうちゃんの　まねをして、大きな　ビスケットを　いっしょうけんめいに　はこんで　みました。

おもくて、あしが　よれよれ。まっすぐに　あるけませ

ん。それでも、はを　くいしばって　がんばりました。池の　こいと　森の　からすが、そんな　よっちゃんを　にこにこ　みていました。

ばんごはんに　なりました。おもいものを　はこんだので、よっちゃんの　手(て)は　ぶるぶる　ふるえて　います。みんなの　えがおの　中で、ビスケットを　そっと　たべてみました。おいしくて、なみだが　でそうになりました。

つぎの　あさ。きょうも　みんなは、ごちそうを　さがしはじめます。

からすが、よっちゃんを　みつけて　いいました。

「おうい、よっちゃん。きのうは　なにか　いいことが　あっただろう？」

「あったとも！　ぼくにも　いいことが！」

よっちゃんの　えがおは、あさの　光(ひかり)に　ますます　き

らきらしていました。

（橋本　ひろみ　作）

へびさん　よろしく

（清瀬市）

ぼくの　すむ　町は、きよせの　したじゅく。きよせの　したじゅくには　へびがいるんだよ。いっぱい　いるんだよ。

それは、わらで　できた　へびのこと。

一ばん　大きいのは、あっちの木から　こっちの木まで、ながくて、大きいんだよ。

この　わらの　へびたちは、木の上から　ぼくたちの　町に　びょうきや　わるいことが　はいりこまないように、まもっているんだって。

だから、町を　まもる　へびなんだね。

ぼくは、まちで　へびを　みかけると、こころのなかで　こういうよ。

（へびさん、よろしく。）
ってね。
だれが　つくって　いるかって？
それをきかれると　うれしいよ。
だって、それは　ぼくの　おじいちゃんと　そのなかまの人たち。
さらさら、つんつんした　わらが、おじいちゃんの　まほうの手で、どんどん　ふとく　あまれて　いくんだよ。そして、へびのような　かたちに　なるんだ。
でもね。たくさん　あむから、おじいちゃんの手は、まっかになってとても　いたそうだ。どんどん　大きく　おもく　なるから、もちあげるときは　とても　お

もそう。おじいちゃん、こしは　いたくないかな。

ついに　きょうは、おじいちゃんが

なかまの人たちと　いっしょに　つ

くった　へびを　木から　木へと

わたらせる　日だ。

ぼくは、おじいちゃんを　じっと

みる。おじいちゃんの　あせ。しんけ

んな　かお。なかまの人たちと　力を

あわせる　かけごえ。ぼくは、そんな

おじいちゃんを　じっと　みる。

へびを　木に　かける　おまつりは、「ふせぎ」ってい

うんだよ。むかしから　つづいている　だいじな　おまつ

りなんだって。

おじいちゃんも、おじいちゃんたちが　つくる　へびも、

ぼくの　まちの　おまつりも、みんな　みんな、ぼくの
まち、きよせの　したじゅくの　じまんです。
きみの　まちの　じまんは、なあに？

（大野　寿久・橋本　ひろみ　作）

むかしむかし柿の木坂で　（目黒区）

目黒のむかしむかしの話です。

目黒のこのあたりはなあ、田んぼや畑が広がり、「ひぶすま村」とよばれておった。ほとんどが米や野菜を作る農家でな。この村は、味のよい竹の子がとれてな。けっこういいねだんで売れたそうじゃ。

村の人たちは、とれた作物を大八車にどっさり積みこんで、市場まで運んだもんだ。この柿の木坂を上ってな。

今ではゆるやかに見えるこの坂は、むかしは、石ころがごろごろしている、急な坂だったんじゃ。

それは、柿がよく実った年のことだった。

じいちゃんが、この坂でそりゃあ、えらい目にあったそうだ。

ある日、じいちゃんが、荷車にめいっぱい柿を積みこんで、いつものように一歩一歩ふんばって、柿の木坂を上っていたときだった。

ガラ、ガラ、ガッチャーン。

＊「大八車」荷物を運ぶための大きな台車。

荷車ごと、じいちゃんは、坂から転げ落ちてしまったんだ。坂のてっぺんまで、あと一歩のところで、力がつきて、荷車の重さに負けてしまったのさ。

もちろん、体は、引きずられてきずだらけさ。おまけに、売り物の柿は、散らばって、われるし、いたむし、やあ、みじめなもんさ。

じいちゃんは、畑にもどるわけにもいかず、市場に行くわけにもいかず……。その場にすわりこんでしまった。

子どものころから、めったに泣いたこともなかったが、そのときばかりは、なみだがボロボロ。ふいてもふいてもこぼれてなあ。どうしようもなかった。しばらくたって、ふと後ろを見ると、通りかかった村の子どもたちが、あちこちに散らばった柿を、一つ一つ拾い集めては、かごに入れてくれているじゃないか。

「じいちゃん、だいじょうぶ？　歩ける？」

と、一人の子どもが、そばに近づいてきて声をかけた。この子は茂平といった。

「おいらたちが、荷車おすから、じいちゃん、引っぱってくれんか。」

茂平の友だちの与作は、そう声をかけると、力をふりしぼって、荷車をおしはじめた。

茂平やほかの子どもたちも負けずに、ありったけの力でおしてあげたのさ。何てありがたいことじゃ。じいちゃんは、手ぬぐいに目を当てて何度も何度もれいを言った。

ふしぎなもんで、あれほどいたかった手足のいたみも、すうっとぬけていくような気がして、力がわいてきたんじゃと。

村の子どもたちのおかげで、じいちゃんは、やっと柿の木坂をこえることができたんだと。

（目黒区教育委員会　作）

＊「高松喜六」
むかし、浅草阿部川町（今の台東区元浅草）の名主だった人の名前。

内藤新宿（新宿区）

高松喜六は、今から三百年あまり前、浅草で生まれました。喜六が十二さいのころ、中野村（今の中野区）のおじさんの家にとまったときのお話です。

その夜のこと、ドンドンドンと家の戸をたたく音に、家ぞくは目をさましました。

「こんな夜中に、いったいだれだろう。」

しんせきのおじさんは、戸口の方に行きました。戸の外から、

「おねがいでございます。旅のものですが、熱が出て歩けなくなってしまいました。どうか一夜のやどをおねがいします。」

と、苦しそうな男の人の声がします。おじさんは、みんなと顔を見合わせました。喜六も心配そうです。

「どうしたものだろう。ほんとうに病気だろうか。」

おじさんのことばを聞いて、おばあさんは言いました。

「あやしい人かもしれないよ。気をつけたほうがいい。」

喜六は苦しそうな旅の人の顔を思いうかべました。

「このごろ、どろぼうにあう家が多いそうだよ。」

おばあさんは、つづけて言いました。喜六も少しこわくなってきました。苦しそうな声はだんだん小さくなります。喜六はじっと考えていましたが、やがて思い切って、

「戸をあけてあげましょう。旅の人がかわいそうです。」

と言いました。喜六のことばに、おじさんは大きくうなずくと、戸をあけました。

外にいた旅の人は、何度も何度もおれいを言うと、気をうしなってしまいました。

喜六たちの熱心な看病で、旅の人は、つぎの朝にはすっかり元気になりました。そして、喜六たちに話をはじめました。

「わたくしは、日本橋のごふくやではたらいております。お店の用事で八王子へ行くとちゅうで、体のぐあいが悪くなりました。なんとか高井戸まで行こうと思いましたが、力つきてしまいました。」

旅の人の話を聞いて、おじさんは言いました。

「日本橋から高井戸までは遠い。旅のお人にはごくろうなことだ。」

そんなことがあってから、いつしか、喜六は、なんとか人びとが安心して旅をすることができないものかと考えるようになりました。

おとなになった喜六は、いろいろな人びとと協力して、日本橋と高井戸との間にしゅく場をつくるどりょくをしました。

そして、ついに新しいしゅく場ができたのです。このしゅく場は、内藤新宿とよばれ、人びとにたいへんよろこばれました。

今では、高いビルがたちならび、とてもにぎわっている新宿は、こうしてできた町なのです。

（赤堀　博行　作）

練馬の名産品（練馬区）

まゆ子の家では、区民農園をかりて野菜を作っています。休みの日になると、お父さんは小さな畑で楽しそうに野菜の世話をしていますが、まゆ子はときどき手つだうぐらいでした。

ある日、区報を見ていたお父さんが、

「まゆ子、練馬大根の種を配っているんだってさ。作ってみようか。」

と言いました。その時は、

「ふうん。」

と言っただけで、あまり興味がわきませんでした。

お父さんは、区の産業地域振興部というところで種をもらってきました。

「練馬大根は、昔、病気をなおすために、おとの様が練馬のお百しょうさんに作らせたのが始まりだといわれているんだ。それ以来、練馬と言えば大根というぐらい全国的に有名にもなったんだけど、今

＊「区報」この場合、練馬区の情報を伝える新聞のようなもの。

ではほとんど作られていないそうだ。だから、練馬区では、練馬大根の名前を残したいと考えて、区民に種を配っているそうだよ。」

まゆ子は、練馬大根という名前は聞いたことがありましたが、どこで売っているのかもわかりませんし、どんな形なのかも知りません。

さっそく種をまいたお父さんに、

「どんな大根ができるの？」

と聞いても、お父さんは、

「楽しみだね。」

と言うだけでした。

まゆ子もいっしょに水やりをしたり、ざっ草をぬいたりしているうちに、小さな畑では大根がりっぱに育ち、しゅうかくをするきせつをむかえました。お父さんがにこにこしながら、

「今日は、大根をぬきに行こう。」

と言ったので、まゆ子もちょっとわくわくしながら畑に向かいました。

畑に着くと、さっそくまゆ子はお父さんに教えてもらいながら、大き

く育った大根の葉(は)っぱをしっかりにぎって引っぱりました。しかし、まゆ子の力ではまったくぬけません。まわりの土を手で少しほって、お父さんといっしょに力いっぱい引っぱると、白い大根がぬけたのです。

「すごい！」

まゆ子はびっくりしました。スーパーで売られている大根にくらべてものすごく長いのです。そして、まん中が太くふくらんでいました。

お父さんが、

「練馬大根は、まん中が太いから、農家(のうか)の人もぬくのがたいへんだったんだ。だから今は、まっすぐでぬきやすい青首大根を作るようになったそうだよ。」

と、教えてくれました。そういえば、お店で売っている大根は、葉っぱに近い上の方が緑色(みどりいろ)をしていて、上から下までほぼ同じ太さです。

（作るのがたいへんなのに、どうして種を配っているのかな。）

と、まゆ子はふしぎに思いました。お父さんは、

「練馬大根で作られたたくあんは、とてもおいしかったそうだよ。今

ではほとんど作らなくなってしまったけれど、江戸時代から作られていたこの大根を、練馬の名産品としてもう一度よみがえらせたいと思う農家の人たちの努力で守られてきたんだよ。」

と言いました。

「学校で〝昔調べ〟をしたときに、このへんには、たくあんを作る工場がいくつもあったって勉強したよ。そうか、練馬大根は練馬の名産品だったんだ。食べてみたいな。」

まゆ子は、しゅうかくした大根を高く持ち上げてみました。来年は学校でも育ててみたいと思いました。そのことを明日さっそく、クラスの友だちに伝えようと心に決めました。

（松野　薫子　作）

わき水の町　東久留米（東久留米市）

東久留米市には、たくさんのわき水があります。市内のいろいろな場所から地下水がわき出し、小さな流れとなり、市内を黒目川、落合川、立野川となって流れていきます。東久留米市は、美しいわき水の町なのです。

みな子もおじいちゃんも、東久留米市に住んでいます。南沢のわき水は、おじいちゃんのお気に入りの場所です。初めて、みな子をさんぽにつれて行ってくれたとき、おじいちゃんは、

「ここからは、一日に一万トンもの水がわき出しているんだ。」

と、教えてくれました。東京都内では、一番多いわき水だそうです。

「一万トンって、どれくらい？」
と、みな子が聞くと、おじいちゃんは、
「学校のプールの四十ぱい分くらいだよ。」
と、教えてくれました。
「一日に、そんなにたくさんの水がわき出ているの？」
みな子はびっくりして、おじいちゃんに、
「この水は、どこからくるのかしら？」
と、聞いてみました。地面の下にたくさんの水があるなんて、とてもふしぎに思ったからです。おじいちゃんは、
「ここの水は、遠くの奥多摩の山にふった雨が、何年も何年もかかって、地面の下の石や砂のすきまを通って流れてくるんだ。だから、きれいなんだ。」
と、ほこらしげに言いました。
さらさらと流れてくる水を見ていると、手を入れてみたくなりました。みな子は、両手でそっとわき水をすくってみました。
「わあ、冷たい。それに、とってもきれい。」

わき水をさわっただけで、心がすうっとするような気がしました。

まわりを見ると、わき水から続く川のまわりには、緑が広がっています。自然の多い東久留米の中でも、とくに美しい場所です。川には魚やザリガニ、こん虫がたくさんすんでいて、みんなが自然の中でゆっくりすごせる、いこいの場になっています。

おじいちゃんは、

「南沢のわき水は、市民の方々が川のそうじをしたり、植物を植えたりして守っているのだよ。おじいちゃんは、子どものころからこの場所がすきだった。昔

とかわっていないのがうれしいなあ。」
と、教えてくれました。
みな子は、もう一度（いちど）きらきら光る冷たい水をすくい上げ、にっこりしながら、そっと流れの中にもどしました。

（松野　薫子　作）

日本の国ぎ　（港区）

ぼくのおじいちゃんは、すもうが大すきです。すもうが始まると、おじいちゃんは、いつも新聞の星とり表をもってテレビの前にいます。

九月のある日曜日のことです。ぼくは、おじいちゃんと散歩に行きました。ぼくの家の近くには、報土寺というお寺があります。ちょうど、このお寺の前を通りかかったときのことです。おじいちゃんは、

「たくや、このお寺には、力士のおはかがあるんだよ。行ってみるかい。」

と言いました。

ぼくは、家の近くに力士のおはかがあるなんて今まで知りませんでした。おじいちゃんは、ほかのおはかとくらべてとても大きなおはかの前で立ち止まりました。

「このおはかにはね、むかし、とても強かった大関がねむっているんだよ。」

＊「報土寺」港区内にある寺。

＊「力士」すもう取り。

＊「大関」「関脇」すもうの位のひとつ。またはそのの力士。

おじいちゃんはそういうと、雷電為右衛門の話をしてくれました。

雷電は、今から二百年ほど前、江戸時代にかつやくした力士です。雷電の本当の名前は、関太郎吉といいました。雷電というのは、しこ名といって力士のよび名です。

雷電は、今の長野県で生まれました。そして、十七さいのときに、江戸ずもう（今の東京で行われていたすもう）の浦風という力士に弟子入りしました。

雷電は、いっしょうけんめいにけいこをして、二十五さいで、土俵にあがりました。いきなり関脇だったそうです。雷電はとてもつよく、三十さいのときには、大関になりました。大関になってますます力をつけた雷電は、たいへんな話題になったほどでした。

雷電は、十六年ものあいだ大関をつとめ、そのせいせきは、二百五十四勝十はい二十一分けというたいへんすばらしいものでした。

「どうだ、たくや、すごい力士だろう。」

＊大関は、当時の相撲の取組が記されている表の最高の位といわれている。

おじいちゃんはとくいそうに言いました。ぼくは、おじいちゃんにたずねました。

「おじいちゃん、すもうが始まったのはいつごろなの。」

「そうだねえ、いつごろかなあ。すもうは日本の国ぎといわれているからね。ずいぶんむかしからつたわっているんだろうねえ。」

おじいちゃんも、よくわからないようです。

「おじいちゃん、国ぎってなあに。」

ぼくは、また、たずねました。おじいちゃんは、

「国ぎというのは、その国を代表するきょうぎのことだよ。」

と教えてくれました。

ぼくは、テレビで見たすもうのようすを思い出しました。おおぜいのお客さんたちが、すもうを見にきています。そして、大声で自分のすきな力士のしこ名をよんでいます。どちらが勝ってもどちらがまけてもとても楽しそうです。

ぼくは、

（すもうは、むかしからたくさんの人たちを楽しませているんだなあ。）

と思いました。

「そうだ、ぼく、すもうのことをいろいろと調べてみようかな。」

ぼくがそう言うと、おじいちゃんは、

「それは、いいことだね。今では、すもうがすきな人は、日本だけではなく、世界中にいるからね。調べたら、おじいちゃんにも教えておくれ。」

と、うれしそうに言いました。

（赤堀　博行　作）

オオタカのすむ里　（町田市）

町田市北部に広がる図師小野路歴史環境保全地域。そこには、時代劇の撮影にも使われるという、昔ながらの自然豊かな里山が残されています。谷戸とよばれる谷あいの水田（谷戸田）では稲作が行われ、地域農家の協力で多くの小学生が体験活動を行っています。

五月、五年生になって、初めての稲作体験。ぼくらのクラスのみんなは、わくわくしながら、学校から二十分ほど歩いて谷戸に着いた。すると、そこは美しい緑に囲まれた別世界であった。いくつも連なる田んぼ。土手にさく小さな花々。田んぼの周りを取り囲む青々とした木々。真っ青な空の下で、ため池の水がキラキラかがやいていた。

ドキドキしながらドロドロの田んぼの中に足をふみ入れると、やわらかい感しょくがとても心地よかった。土の重みを感じながら、下をよく見てみると、チョロチョロと動いているものがたくさんいた。

*「タイコウチ」
水辺にすむ
こん虫の一種。

「大きなオタマジャクシだ。」
「カエルだ。」
「ヤゴだ。」
「タイコウチだ。」
周りから、生き物を見つけてはさけぶ声が聞こえてきた。ぼくも必死になって生き物をさがした。
「わあっ！　ドジョウがいる！
つかまえるぞ。」
ぼくは夢中になった。ドジョウを両手でそっとすくい上げて、
「おーい。だれか入れ物を持ってきて！　ドジョウをつかまえた！　ドジョウだ！」
田んぼわきの用水からさけぶと、

「そのドジョウは、ホトケドジョウといって、数が少くて、とても貴重（きちょう）な生き物です。絶対（ぜったい）にとってはいけません。」
と、先生に注意をされた。
（せっかくつかまえたドジョウなのになあ。）
ぼくは、しぶしぶとドジョウをため池にかえした。

十月、稲（いね）かりの時期が来た。ぼくは自分の家でもバケツで稲を育てていた。ところが、バケツで育てていた稲（いな）ほは、稲かりの直前に、全部スズメに食べられてしまっていた。あみをかぶせて、しっかりと守る方法をとっておけばよかったと後かいした。
しかし、谷戸田で育ててきた稲は、スズメに食べられることもなく、豊かに実っていた。そのことが不思議でならなかった。ぼくは思いきって、稲かりのときに、管理組合のおじさんに聞いてみることにした。
「ここのあたりの谷戸田では、スズメがあまりやって来ないんだ。なぜだと思う？　実は、オオタカが生息しているからだよ。」
（えっ。）
ぼくはおどろいた。このあたりには、キツネやタヌキがいるというこ

＊「オオタカ」タカの一種で、数はとても少ない。

とは知っていたが、まさかオオタカがいるとは。おじさんは続けた。
「オオタカをおそれて、スズメがやって来ないんだよ。」
「オオタカの巣を見てみたいなあ。」
ぼくが言うと、管理組合のおじさんは、急にきびしい顔になって、
「それはできない。」
と言った。ぼくはびっくりした。続けて、おじさんは、
「いいかい。オオタカは、とてもびん感な生き物なんだ。わたしのようにここで仕事をしている者の顔はよく覚えていてけいかいしないけれど、知らない人がやってくると、とてもけいかいして、いなくなってしまうんだ。だから、絶対に巣に近づいてはいけないんだ。」
と言った。しばらくすると、おじさんはおだやかな表情(ひょうじょう)になって、
「田んぼにも、様々な種類のカエルやホトケドジョウがいただろう。残念なことに、自然散さくなどでやってくる人の中には、ドジョウをとったり、きちょうな野草などの植物を平気でぬいて持っていったりする人もいる。」
と続けた。
ぼくは、ドキッとした。谷戸田でホトケドジョウをとろうとして、先

生に注意をされたときのことを思い出したからだ。

「ここでは、様々な生き物のいる豊かな里山であるために、わたしたち管理組合が、草をかったり木を切ったりと一年を通じていろいろな仕事をしているんだ。わたしたちが、自然の手入れをすることで、より自然が生き生きとかがやくんだよ。きみたちが、稲作をしにこの里山にきたとき、ここの自然の美しさを感じてくれることがうれしいんだ。」

（自然を守るということ……。）

おじさんの言葉から、ぼくは、あらためて考えさせられた。谷戸田を見わたすと、夕日に照らされ黄金にいろどられた稲ほが、秋風にゆれている。ふと見上げると、大きな羽を広げ空をまう鳥のすがたが見えた。

「あっ、オオタカだ。オオタカが飛んでいる。」

（鈴木　裕子　作）

おもうわよ　（青ケ島村）

六年生になったわたしは、中学生といっしょに運動会の用具の準備を任されました。用具は、とても重くて運ぶのは大変です。

（大変だなあ……。姉さんは、どうしていたんだろうか？）

わたしは、いそがしく動き回っていた姉の姿を思いうかべていました。

わたしたちのくらす青ケ島は、都心から三百六十キロ余り南の洋上にある、周囲九キロ余りで人口約二百人の小さな島です。

この島には、小学校と中学校が一校ずつあります。今年は小学生が十五人、中学生が八人いました。児童・生徒数が少ないので、学校行事などを合同で行うことがあります。

この島には高校がないので、中学生は卒業すると、進学や就職のため、島から出て、八丈島や二十三区内などへ行きます。

去年の中学三年生は、四さい上のわたしの姉一人でした。

そのため、姉は、最高学年として、委員会活動や学校行事などでみん

なをまとめていました。

運動会では、応えん団長として学校のみんなが楽しめるようにもり上げていました。

水泳大会でも、全体の司会をやり、大活躍でした。

学芸会では中学生の劇はもちろん、小・中学校全体の中心になってアイデアを出したり、台本を作ったりしていました。

大たこあげ大会では、たこ作りを小学生の低学年にも分かるようにていねいにやさしく教えていました。みんなも立派なたこができたけれど、やっぱり中学生の大だこが一番立派に作られていて、すごいなあと思いました。

姉は、いつもいろいろな行事でみんなを引っ張ってがんばっていました。

卒業式が終わったあとの、天気がよく海の静かな日、姉は八丈島との連らく船「環住丸」で島から旅立つことになりました。

見送りには、学校の人たちや島の人たちみんなが来てくれました。

船に乗りこむ前に、姉はわたしのそばにきて、そっとささやきました。

「父さんや母さんをたのむね。学校のみんなのこともたのむね。」
と。
ボーッという汽笛とともに、船はゆっくりと動き始めました。
この島のみんなは、さようならという思いをこめた「おもうわよー。」
という言葉で見送っています。
姉と過ごしたいろいろな思い出が、頭の中をかけめぐりました。思わ
ずなみだがあふれ出てきます。
姉も、
「おもうわよー。」
と、手をふっています。
船かげは、みるみる小さくなっていきました。
わたしは、姉が船に乗る前にささやいた言葉を思い出して、
（がんばらなきゃ。）
と思い直し、運動会の用具をもつ手に力をこめました。

「おもうわよ」とは島に伝わる別れの言葉です。オモウは、（思う、想う）を意味します。また、特定の人のオモ（面、顔）を思い浮かべることを意味します。別れのとき、いとしい人やなつかしい人を強く思うことが、「おもうわよ」という言葉になったのです。

青ヶ島では、江戸時代に大きな噴火があり、全島民が八丈島へ避難したという歴史がありました。避難した島の人たちは、青ヶ島へのなつかしさを心にもち続けながら、八丈島での避難生活を続けたといいます。島の人々は、何年も何年も青ヶ島へ帰りたいと願い続けて、五十年の年月が過ぎたとき、ようやく環住（青ヶ島へ帰る）の夢を実現したのでした。

（大野　寿久　作）

よみがえれ　ふるさと三宅島（三宅村）

三宅島がふん火したのは、ぼくが一年生の夏休みのことだった。今まで、約二十年に一度、ふん火してきたが、平成十二年六月二十六日、ついにその日が来てしまった。

ふん火のたびに灰が積もった。八月十八日には、地上八千メートルから一万メートルまでふんえんが上がり、直径五十センチメートルの石も飛ばすほどだった。やがて、八月二十九日には、地しんやふん火活動で島にいることが危険なので、全島ひなんかん告が出された。ぼくたちは、三宅島をはなれ、東京へひなんした。ひなん先が決まると、それぞれひなん先の学校へ転校することになり、ぼくと家族のひなん生活が始まった。

ぼくは二年生になった。野球チームに入り、大好きな野球に夢中になった。毎日が楽しくなり、新しい友だちとも仲良くなれた。それでも、三宅島に帰りたいといつも考えていた。

五年生になり、夏休みが終わるころ、うれしいニュースが飛びこんで

きた。来年の二月には島に帰れるという。村役場の人が住宅のことや学校のことを説明してくれた。火山ガスのあまり来ない三宅地区の学校にスクールバスで登校すること、ガスマスクをいつも身につけることなど、ちょっと大変なこともあったが、約束を守れば島での生活ができることがわかったのだ。家族でも真けんに話し合い、帰ることに決めた。今の学校の友だちや先生と別れることがつらかったが、四月から三宅島の友だちといっしょに生活できることが、本当にうれしかった。

平成十七年の四月、三宅島では、今までの三校が合同で三宅村立小学校としてさい開した。ぼくは、六年生として三宅島にもどることができた。学校には火山ガスにそなえた脱硫装置があるなど、今までに経験したことがない生活だ。でも、やっぱり友だちといっしょに三宅島で勉強できることが何よりもうれしかった。

三宅島の海と自然が、ぼくたちを受け止めてくれた。火山ガスのえいきょうで立ち入り禁止区域になったところは、自然の木々もかれてしまっていたが、島のみんなの努力で農業や漁業も少しずつできるようになってきた。

六月に入ると、外に出られることも多くなってきた。学校の先生方が

＊「脱硫装置」火山ガスを安全なものにする機械。三宅島では、教室に取り付けられている。

校庭でサッカーを始めてくれた。ぼくも友だちをさそって練習に参加した。少しずつ元気が出てきた。

学校の授業では、お世話になったひなん先の学校の友だちや全国のみなさんに、三宅島の案内をホームページで発信することになった。学校さい開のとき、ボランティアの方が来て、インターネットをつないでくれたのだ。みんなで話し合って「三宅島じまん」を考えることにした。

三宅島の海は、とても美しい。シマアジ、サバ、ムロアジ、メジナ、カンパチ、アカイカなど、群れをつくって泳ぐ魚たち、カクレクマノミやイセエビ、天気のよい日にはウミガメやイルカも見られること、大路池の野鳥やアカコッコ、そして雄山の火山活動などは、すぐに思いついた。でも、なんだかちょっと足りない。

そんな時、学校の体育館で夕方、高校生や中学生が三宅島の神着たいこを大人といっしょに練習していることが分かった。お父さんに聞いてみたら、なんととなりの鈴木さんのおじいさんが教えているらしい。ぼくは、お父さんにお願いして練習に連れて行ってもらった。

おなかにひびく大きくて勇ましい感じのたいこの音がした。ふん火で休止していた、昔から伝わる島のたいこの練習がさい開されたのだ。高

校生が鈴木さんから真けんに教わっていた。
「たくや君、君もたたいてみないか。」
と、鈴木さんが声をかけてくれた。ぼくは、鈴木さんや高校生に教わりながら、たいこをたたかせてもらった。とてもきんちょうした。
「三宅島のこの地域に伝わるたいこを、絶やすわけにはいかない。島にもどった以上は、島のわかい人たちにこの伝統と魂を伝えるのがわたしの役目なんだよ。たくや君もこれからいっしょにやってみないか。」
と、鈴木さんがさそってくれた。ぼくは、自信がなかったけれど、いっしょに教えてもらうことにした。
高校生のTシャツに、「島人魂」と書いてあった。
「あれ、どういう意味？」
と、お父さんに聞いてみた。
「島の人々は、ふん火にも負けずに、いつもみんなの力で困難を乗りこえてきたんだ。それを島人魂というんだよ。」
と、教えてくれた。ぼくは、だまってうなずいた。
次の日、ぼくは学校でクラスの友だちと島じまんのことをもう一度考

えてみた。そして、たいこの練習にも友だちをさそった。ぼくは、みんなで鈴木さんからたいこを教わりながら、島人魂についてもっと考えてみたいと思うようになっていた。その日から、欠かさずに友だちとたいこの練習に参加した。ふしぎととても元気がわいてきた。

ぼくたちのサッカーチームが、伊豆諸島のサッカー大会に招待されることになった。そのとき、島じまんをチームで準備することになった。ぼくたちは、全員いっちで、今練習しているたいこを発表することにした。サッカーの試合もがんばったが、たいこの音も力強くひびかせた。ほかのチームの人たちが、ぼくたちに大きなはく手を送ってくれた。島に帰ることができて本当によかったと心から思えた。

数日後、近所に東京からお年よりがもどって来るので、家のかたづけに人手が必要だとお父さんとお母さんが話していた。

「ぼくが行くよ。」

と、思わず大きな声を出していた。お父さんはおどろいた顔をしてふり向いた。

「たくや、どうしたんだ。」

「それが島人魂って言うんだよ。お父さん。」

それを聞いたお父さんとお母さんは、うれしそうに顔を見合わせて、
「たのむよ。」
と、笑顔でこたえてくれた。

（宮島　徹　作）

小金井桜（小金井市）

春になり、桜の花が美しくさきほこるころになると、家族みんなで近くにある小金井公園へお花見にいくのが、わが家の行事となっていた。ぼくは、このお花見を毎年楽しみにしていた。

家族みんなで出かけるというのも楽しみの一つだけど、満開の桜を見上げるのが小さいころから好きだった。見ているだけで、何か、明るい気分になるからだ。

今年も桜の季節がやってきた。ぼくは、五年生になる。テレビのニュースでも、桜前線のとう来を伝えるようになったころ、次の日曜日に花見へでかけようという話題が夕食のときにもちあがった。当然、みんなが大賛成で、日程はすぐに決まった。

日曜日、天気はよく、花見びよりだった。小金井公園に着くと、桜が美しくさいていた。ぼくは、いつものように桜を見上げた。いい気分だ。

そのとき、二さい下の弟がぼくに話しかけてきた。

「ねえ、お兄ちゃん、何で『花見』っていうんだろう。だって、桜を見

てるんだから、『桜見』っていうほうが正しいんじゃないのかな。」

ぼくは、考えてもみなかった。当たり前のように『花見』という言葉を使っていたぼくは、弟のぎ問に答えられなかった。こまっているぼくを見て、お父さんが助け舟を出してくれた。

「桜は、昔から日本人が親しんできた花なんだよ。」

「へえー。」

弟は、わかった風な返事をしていた。ぼくは、お父さんの言葉を聞きながら、どれくらい昔から桜は親しまれてきたのだろうか、とぎ問をもった。さっそく、お父さんに聞いてみると、

「小金井の桜は、江戸時代から人々に親しまれているんだよ。家に帰ったら、もっとよく教えてあげるよ。」

と答えてくれた。ぼくは、おどろいた。江戸時代の人たちも花見を楽しんだのだろうか。この公園の桜も、そんなにも昔からあるのだろうか。様々なぎ問が、わいてきた。

家に帰るとさっそく、お父さんは資料を持ってきて説明してくれた。もともと、小金井の桜は、小金井橋を中心とする、玉川上水堤の両岸

約六キロメートルに植えられたのがはじまりで、十九世紀のはじめのころ、『小金井桜』の名で桜の名所として江戸の人々に知られるようになったそうだ。

「江戸の人々も花見を楽しんでいたようだよ。」

お父さんは、そう言って、当時の花見の案内書であるという「玉花勝覧（ぎょっかしょうらん）」についての資料を見せてくれた。そこには、このように書いてあった。

＊「玉花勝覧」江戸時代、旅をして書かれた文章。

小金井橋より西、ぬくい橋、とめ橋のほとりまで目も及ばず両岸
花さき連ねて、白雲の中に遊ぶかとうたがう。

（意味）　玉川上水の両岸の桜は、小金井橋から西（上流）にある貫井橋やとめ橋（現在の喜平橋）のほとりまで、限りなく続くように美しくさきほこっていて、まるで白い雲の中をさまよっているかのようだ。

白い雲の中をさまよっているかのようだなんて、どんな様子なんだろう。そんなぼくの気持ちにこたえるように、お父さんは説明してくれた。

「さすがに写真はないけれど、小金井桜の様子をよんだ俳句や短歌、絵などが資料にのっているよ。」

行く水の　音やしきりに　花吹雪　　万葉

小金井の清き流れに影見えて　花に心を寄する諸人　　楮子

「どちらとも、玉川上水についてふれているね。お父さんには、水の流れが桜の美しさをひき立てているように感じられるなあ。ほら、これは、浮世絵で有名な歌川広重がかいた風景画だね。」

＊「万葉」
この俳句をよんだ人の名前。

＊「楮子」
この短歌をよんだ人の名前。

＊「諸人」
たくさんの人々。

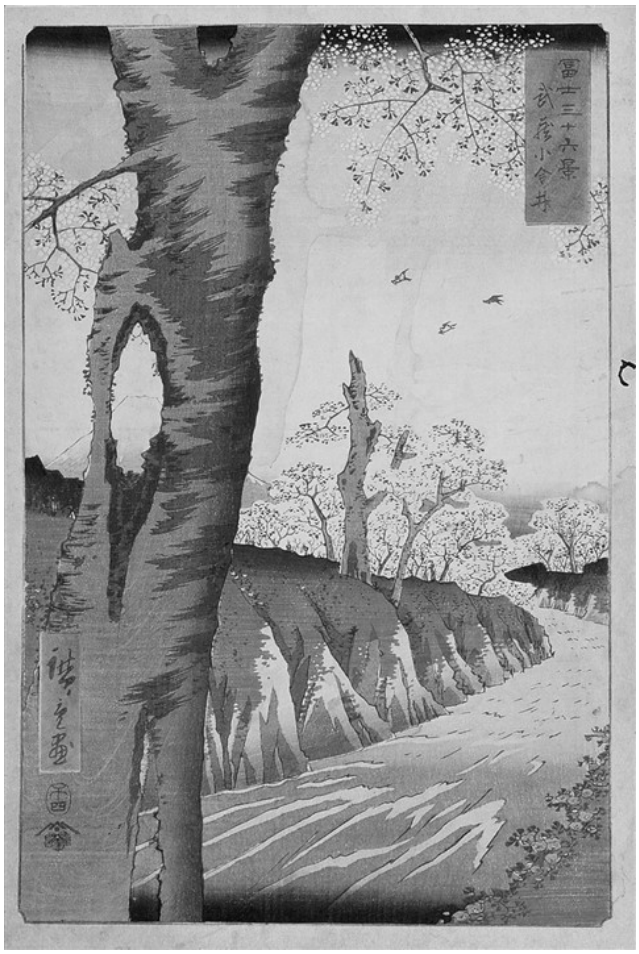
＊「浮世絵」
江戸時代を代表する絵の一つ。

＊「古木（こぼく）」
長い年月をへた木。

浮世絵にかかれていた玉川上水と桜なみ木は、とても美しく見えた。

「今でも、玉川上水にそって桜なみ木があるのは知っているだろう。その中には、古木（こぼく）とよばれる昔ながらの小金井桜があるそうだよ。」

お父さんの話によると、小金井公園の桜は、公園がつくられたときに植えられたもので、小金井桜そのものではないそうだ。しかし、小金井桜の伝統（でんとう）を受けついでいるものなのである。一方、玉川上水ぞいの小金井桜は、だんだんとおとろえてきているという。



浮世絵

「富士三十六景（けい）　武蔵小金井（むさしこがねい）」

歌川広重

ぼくは、江戸の昔から親しまれてきたという、小金井桜をどうしても見たくなった。

お父さんの話を聞いた後、ぼくは玉川上水ぞいにある『小金井桜』に向かった。そして、教えてもらった古木の桜を見つけた。

「これが小金井桜なんだ。」

ぼくは、お父さんの話を思い出しながら桜を見上げた。

（由良　隆　作）

だるまさん　だるまさん

（西多摩郡瑞穂町）

日本のだるま屋さんのご主人が、ある時、カナダへ旅行したときのことです。おすし屋さんを見つけ、入ってみました。なんだか、ほっとするような、すしずのかおりがたちこめる店内。見回すと、真っ赤な日本のだるまが、かざられているではありませんか。ご主人の顔は、心からわきあがるうれしさでいっぱいになりました。

現在、東京都内でだるまを作っている所は、たったの八けんしかありません。そのうちの五けんは、ご主人が住む瑞穂町にあります。

ご主人には、息子さんが一人います。だるまは、初もうでで売られることが多いので、だるま職人の家に生まれ育った息子さんは、生まれてから一度も、のんびりとしたお正月を過ごしたことがありません。元旦も、朝の五時から、たくさんのだるまをトラックに積んで、初もうでの人たちに売りに出かけます。境内には、だるまを売る店が、何けんも並ぶのです。息子さんは、お正月から一人ぼっちになるのはいやなので、いつも父についていきました。

息子さんが、十一さいのときのお正月のことです。
境内は、大勢の初もうで客でにぎわっていました。すると、
「おお、いたいた！　だるまさんは、やっぱり、きみのところで買わなくちゃなあ！」
知らないおじさんが、息子さんをめがけて、うれしそうに近づいてきました。
「きみは、去年より大きくなったなあ。わたしの家では、きみのところで買っただるまさんのおかげで、この一年、家族みんながいい年を過ごせたよ。ありがとうな。また、来年もくるからな、たのむよ。」
息子さんは、びっくりしました。それまで、お父さんの仕事やだるまについて、深く考えたこともありませんでした。それが、このことを思い出すたびに、うれしさがこみあげてくるのです。息子さんには、一生忘れられない宝石のような思い出となりました。

息子さんは大人になり、自分で決めて、だるま職人の道を選びました。
息子さんは、今、こう思っています。
「だるま作りは、こつこつと根気のいる仕事できつい。一日中同じ姿勢

でこしが痛(いた)い。だるまの顔をかくときは、神経(しんけい)を筆先に集中させる。人にやれって言われても、できる仕事じゃない。自分がやるって決める強い心がなければ、だるまは作れませんよ。」

そんなきつい仕事を、息子さんはなぜ選んだのか……。それは、あの宝石のような思い出につながります。

だるまを求めて、毎年、笑顔でやってきてくれるお客さんたち。息子さんは、だるま作りを通して、自分が生まれ育った国「日本」やふるさとの町「瑞穂町」が見えてくるような気がしています。これからも、だるまを求める人がいる限(かぎ)り、息子さんは、心をこめてだるまを作っていくつもりです。

（橋本　ひろみ　作）

小石川上水をつくった人―大久保藤五郎　（文京区）

「お父さん、暑いね。汗が止まらないよ。」
僕は、あまりの暑さにこう言った。
地下鉄の水道橋駅から地上に出た途端、汗が吹き出た。とにかく暑い。今年の夏も猛暑が続いている。

そもそも、ここ水道橋に来たのは、夏休みの宿題で「文京区の地名や史跡の調査」が出され、何を調べようかと悩んでいたところ、父が、
「水道橋はどうだ。」
と言ったからである。僕は、
「水道橋？」
と、気乗りのしない返事をした。
「ああ、水道橋って水道の橋って書くんだ。水道の橋なんてないけれど、なぜ水道橋っていうか調べるのもおもしろいんじゃないかな。」
そう言われて、そう言えばそうだな。ちょっと調べに行ってみようかと思った。
「うん、じゃあ水道橋にしてみるよ。」
「お父さんも一緒に行こう。少しは役に立つかもしれないよ。」
父は微笑みながら言った。

「明雄、こっちだ。」
と父。二人で夏の強い日差しの中を水道橋駅から外堀通りをお茶の水に向かって歩いて行った。しばらく歩くと碑があって、日陰になっている所があった。
「さあ、ここで少し休むか。」
「うれしいな。このままじゃ干上がっちゃうよ。」

＊「上水」
飲料などのため、溝（みぞ）や管などを通して供給される水。

＊「懸樋」
地上に掛け渡して、水を引く樋（とい）のこと。

僕は、かばんからペットボトルを出して、少しぬるくなったミネラルウォーターをがぶ飲みした。
「あー、おいしかった。少し生き返った。あれっ、この石、何かな。何かの文字が掘ってあるよ。神田上水……。これなんて読むの。」
「これはな、『神田上水懸樋跡』って読むんだよ。その下の説明板にふり仮名がふってあるだろ。」
「あ、本当だ。」
そこには、江戸時代のこの付近の風景が描かれた絵とその説明の文が書いてあった。

神田上水懸樋（掛樋）跡
江戸時代、神田川に木製の樋を架け、神田上水の水を通し、神田、日本橋方面に給水していました。
明治三十四年（一九〇一）まで、江戸・東京市民に飲み水を供給し続け、日本最古の都市水道として、大きな役割を果たしました。
この樋は、懸樋（掛樋）と呼ばれ、この辺りに架けられていました。この絵は、江戸時代に描かれたもので、この辺りののどかな風情が感じられます。

「へえ。江戸時代に水道があったんだ。この絵を見てよ。川の上を水道の橋が架かっているよ。そうか、水道の橋が架かっているから水道橋っていったんだ。」
「水道橋という地名の理由が分かったかな。」
「だけど、川の上に水が通る橋を架けるなんて、発想もすごいけど作ってしまうのもすごいや。」
「では、何でそこまでしたか分かるか。」
「……。」

「分からないか。それじゃ、その答えを見つけに行こう。この先に東京都水道歴史館があるから、そこに行けばきっと分かるよ。」

東京都水道歴史館に着くなり、父はさっさと二階に上がっていった。そこには、江戸時代の水道について展示があった。

江戸時代の初期、江戸の町は湿地地帯を埋め立ててつくったため、井戸の水や川の一部の水には、塩分が混じっており、飲み水の確保に苦労した。
また、江戸の町の人口が増えてきて、幕府は玉川上水、神田上水などの上水を長年にわたって作り、江戸の人たちのために水の確保をした。

「あ、この模型は、さっきの水道橋だ。」
「この橋には、水番という水を守る人がいたそうだ。それだけ水が大切だったということだ。」
「このような水道橋はだれが作ったんだろう。」
「詳しいことは、よく分からないんだよ。神田上水のもとになった小石川上水を作り上げた大久保藤五郎という人がいるんだ。」
と言って、父は僕に大久保藤五郎について次のように話してくれた。

大久保藤五郎は、徳川家康が江戸幕府を開く前に三河（現在の愛知県あたり）で家臣として仕えていた武士であった。若い時に地元での戦で、鉄砲の弾を腰にうけ、治療を行ったが、歩行の自由がうばわれた。武士としての活躍ができなくなった藤五郎であるが、常々、菓子を好み、自分で菓子を作ることを好んだ。ある時、家康に

自ら作った菓子を献上し、これをきっかけにして藤五郎は家康と懇意になった。藤五郎は武功では貢献できない分を菓子作りに専念した。

家康が、三河から江戸に移るときには、江戸の地は古来より飲料水が悪く、生活をするのに困難の地であった。そこで、家康は江戸の地に清涼な飲料水を確保するよう大久保藤五郎に命じた。

この命令を受けて、天正十八年（一五九〇年）、藤五郎は江戸福田村に屋敷を構え、住民に飲料水の確保の為にこの地に来たことを説明し、協力を仰いだ。藤五郎は、水量豊かである井の頭池を探しあて、濁りのない澄んだ水であり、飲料に適していると判断をし、上水の工事を始めた。藤五郎は腰のけがによって歩行困難であったが、三か月間という短期間で、井の頭池から江戸市中へ清涼な飲料水を供給する小石川上水という大工事を完成させた。藤五郎は、井の頭池から上水を引くだけでなく、江戸湾の満潮時に海水が文京区江戸川橋付近まで入ってきて、人々が困っていることを見て、江戸川橋の上流に堰を作り、そこで海水の入水を堰き止めることもした。また、市中には上水を溜める井戸を三千六百六十二か所を作った。

このような工事によって、清涼な飲料水が文京区水道町、小日向町を抜けて小石川後楽園に入り、後に作られる神田川放水路の上を懸樋の橋で通し、江戸城の一部や神田、小川町、日本橋まで給水されるようになったのだ。

大久保藤五郎は、小石川上水の功績によって「主水」の名を与えられた。こののち、江戸の人口が増え、神田上水、玉川上水などが開設されるようになった。

大久保藤五郎が作った小石川上水が、東京都でも日本でも初めての水道となったのである。

＊「主水」
「もんど」とも読む。大久保藤五郎は「もんと」と名乗ったといわれている。

「大久保藤五郎はすごいんだね。初めての水道を作ったんだ。」

「しかも江戸初期のこの土地は、まだ十分に開墾されていない荒れた土地だったらしいしな。今みたいに機械もなかった時代だったんだ。」

「そうか、人の手によって工事をしなければならなかったんだ。大変だったろうな。」

「それでも、大久保藤五郎は小石川上水を作りあげたんだよ。なぜだと思う。」

父は、そう言って僕の顔を見た。

僕は、父の話から大工事の様子を想像してみた。そして、黙(だま)ってうなずいた。その時、僕は言葉にしなかったが、心の中では、

（何事も初めてのことは大変なんだ。でもだれかが初めての道を切り拓(ひら)かなければならないとしたら……。僕にもできることから始めていこう。）

と思っていた。

「お父さん、水道橋を調べに来てよかったよ。」

それを聞いて、父は微笑した。

父と僕は東京都水道歴史館を出て、日差しの厳しい中、外に出た。

僕は、人々のために汗を流した大久保藤五郎のような人間の努力が今でも生きていることに感動した。この暑い夏は、まだまだ続くのだろう。でも、僕は父と一緒に歩いたこの日のことを忘れないだろう。

（金子　善厚　作）

＊「俳人」
俳句をつくる人。
＊「松尾芭蕉」
江戸時代の俳人。
＊「与謝蕪村」
江戸時代の俳人。
＊「野点」
野外で茶をたてること。
＊「秀逸」
すぐれた作品に与えられる賞。

大きさとやさしさ　（足立区）

「どうして私の句が選ばれないんだろう。」

裕美は腕を組みながら絞り出すようにつぶやいた。裕美の通う中学校では、毎年行われる「炎天寺　一茶祭り」の「全国小中学生俳句大会」に生徒全員が参加している。中学校の玄関ホールには、今年の俳句大会で、特選などに入選した人の名前がその句とともに、校長先生の直筆で大きく掲示されていた。

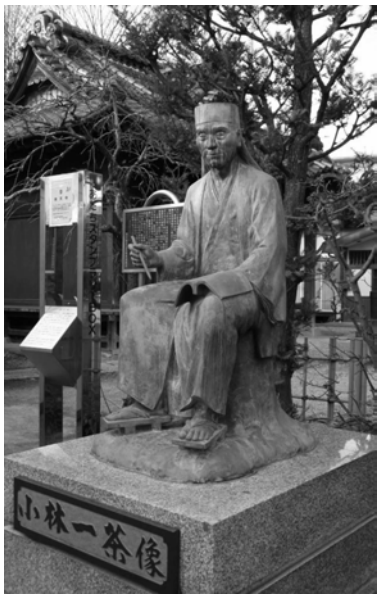
小林一茶は、

やせ蛙　負けるな一茶　ここにあり

等の句で有名で、松尾芭蕉、与謝蕪村とともに三大俳人といわれた。晩年には芭蕉と蕪村が千住に住んでいたので、一茶もしばしば千住を訪れ、足立区の六月にある炎天寺にも足をのばし、

蝉泣くや　六月村の　炎天寺

という句も残している。



炎天寺では、その一茶にちなんで、一九六二年から「一茶祭り」と称して小中学生の俳句大会を、一茶の命日十一月十九日に近い「勤労感謝の日」に開いている。この日は、二十万点を超える中から選ばれた秀句の表彰式が行われ、境内では野点、琴の演奏、そしておでんが振る舞われる。やせ蛙と大蛙の相撲も行われる。このように、俳句一色のにぎやかなお祭りが催され、終日にぎわいをみせている。

裕美は、昨年の一茶祭りで、「秀逸」に入選している。今年も連続入選をねらっていたのだ。今年の句は、

＊「びょう跡」
画びょうの跡。

秋の陽に　びょう跡のこして　姉嫁ぐ

この作品は、裕美にとっては自信作だった。
「どうしたの。裕美。」
声をかけられて裕美が振り返ると、奈緒の心配そうな顔があった。
「じっと腕を組んで考え込んで……。どうしたの？」
「だって……。」
裕美はどう答えていいか迷ったが、思い切って、
「だって、わたしの句、今年は入選もしていないんだよ。」
「そうなの……。今年のもよかったのにね。」
裕美は続けて言った。
「昨年の句より今年の句の方がずっと出来がいいのに。わたし、自信があったんだ。それに、「特選」に選ばれた村上君の句、意味がよく分からないじゃない。絶対、裕美の句の方がいいよね。奈緒、村上君のあの句、どう？」

さそり座の　尾の一げきに　流れ星

貼り出されている村上君の句を見上げながら、奈緒は、
「う〜ん。」
と、あいまいに答えた。
家に帰ってからも、裕美の気分は晴れない。母から夕飯の買い物を頼まれても、二度目の催促でやっと腰を上げた。
「さっさと行ってきてよ。」
「ハイハイ……。」

「返事は一回でいいの！」
裕美は、逃げるようにして玄関から出て行った。
「あーら裕美ちゃん、一茶まつり、どうだった？」
と、乾物屋のおばさんが声をかけてきた。
（だから、いやだったんだ。）
裕美は心の中でつぶやいた。乾物屋のおばさんは、俳句が好きで、裕美が今年応募した句も知っている。
「あの句、あたしも気に入っているんだよね。『秋の日に』じゃなくて『秋の陽に』ってところが深いよね。で、どうだったの、一茶祭りでの結果は。」
「……。」
裕美が答えないでいると、
「ダメだったのかい……。あたしはいいと思うよ。うん。いいよ、あの句は。」
「そう思うでしょう！」
我が意を得たとばかりに、裕美は一気に話し始めた。
「わたしの句、いいでしょ。今年のはすごく考えたんだ。で、すごくいい句ができたと思っていたのに……。それにね、同じクラスに「特選」に選ばれた子がいるんだけど、よく分からない句なのよ。」
裕美は話し始めたら止まらなくなっていた。

次の日、学校でも裕美の口は止まらなかった。会う人ごとに、
「村上君の句より、わたしの句の方がいいでしょ。」
と、半ば押しつけるように言って回っている。
「……ねえ、亜紀もそう思うでしょ。」
と、裕美が亜紀に教室で話しているところへ、村上君が入ってきた。村上君は、裕美の方をちらりと見ると、黙って自分の席の方へ向かった。裕美も、
「またあとでね。」

と、亜紀に小声で言うと、亜紀から離(はな)れて自席に着いた。
「ねえ、裕美。」
奈緒が裕美に声をかけてきた。
「ちょっと、言い過ぎなんじゃない。村上君のことよ。」
「……。」
裕美はにらみ返すように奈緒の目を見たが、奈緒も視線をそらさなかった。
「いいのぉ！」
裕美は強く言うと、おもむろに立ち上がり、村上君の席の方へ歩いていった。
「村上君、特選ね。オメデトウ。」
大きな声でわざとらしく、少しとげのある言い方だ。そんな調子の裕美に対して、村上君は少し考えてから静かに答えた。
「うん。ありがとう。でも、ぼく、君の句も好きだな。『秋の陽に』ってきれいだよね。静かな情景の中に、時間の流れとお姉さんがいなくなった寂(さび)しさが感じられるよね。」
「……。」
裕美は言葉が出なかった。

一茶祭りの日、裕美は落ち着かなかった。本を読んでいても集中できないし、マンガに替えてもすぐに投げ出してしまった。
（あー。考えないようにすればするほど、気になってくる。）
一茶祭りでは、様々な催し物のメインとして、俳句大会の表彰式がある。「特選」の受賞者は、選者の先生から直接言葉をかけてもらえる。村上君も表彰されるのだ。
（村上君にはどんな言葉がかけられるのかな……。）
思い立ったように、裕美は奈緒に電話をかけた。
「ねえ。一茶祭り、一緒に行こうよ。」

一時間後、裕美と奈緒は炎天寺の境内にいた。境内は大にぎわいだ。おでんを食べたり、痩せ蛙と大蛙の相撲を見物したりして時間を過ごした。

「そろそろ始まるよ。」

奈緒に言われて、

「わかってる。」

と、裕美は怒ったように答えると、表彰式の会場へ向かって歩き出した。

俳句の応募は日本各地の学校だけでなく、海外の日本人学校からも多く寄せられているため、表彰式に出席できない人も多い。村上君は受賞者の中でも前の方に並んで座っている。選者の先生が一言ずつ声をかけて賞状を渡していく。

いよいよ、村上君の順番がきた。選者の先生は、賞状を渡すときに村上君だけではなく、マイクを通して会場全体に向かって話し始めた。

「『さそり座の　尾の一げきに　流れ星』、この句にふれてわたしは驚きました。すごい発想力だと。流れ星という一瞬の出来事を鋭くとらえ、大人も及ばぬ創造力で十七文字に再現してくれました。夜空の美しさとダイナミックさ、そして、若い人がもつ創造力の無限の広がりを感じずにはおれませんでした。すばらしい句です。」

「ありがとうございます。」

と答える村上君のほおは赤くなっていた。

裕美は会場を後にすると、しばらく境内をぶらぶらしていた。

「裕美、どうしたの。さっきから何も言わないで。」

「別に……。ちょっと考えごとをしているだけ。」

「村上君の句のこと？」

「うん……。」

歩きながら境内の出口に向かうと、村上君の姿が見えた。裕美は気付いても声をかけずにいたが、村上君は裕美に気付くとすぐに笑いながらやってきて、

「やあ、来てたんだ。」

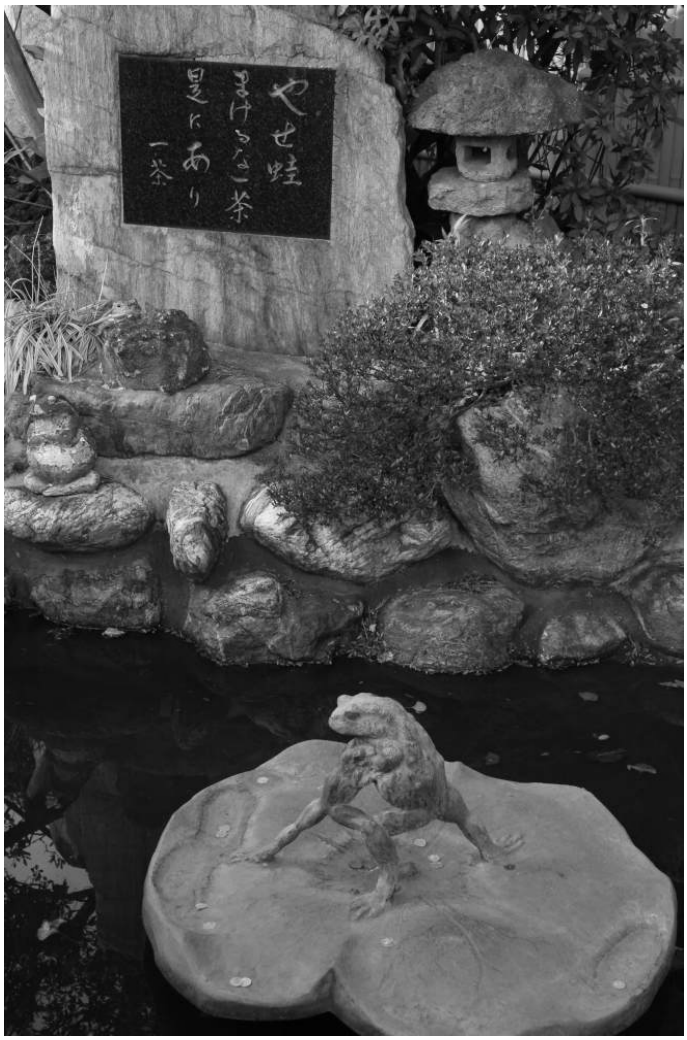
と、軽い口調で話しかけてきた。裕美はとまどって下を向いていたが、思い切ったように顔を上げ、村上君の目を見て言った。

「うん…。『尾の一げき』、大きくて、すごいね。スケールが違うね。わたしのと……。」

「ありがとう。君なら分かってもらえると思っていたよ。あの句はぼくの自信作だけど、君の句は、どの句もやさしさが感じられるんだよね。ぼくには詠めないなって……。」

そう言って村上君はニコッと笑った。裕美も自然に笑顔を返すことができた。

（小貝　宏　作）



浅間山の魅力（府中市）

浅間山は、三つの頂をもつ府中市唯一の山である。三つの頂とは、浅間神社がある標高七九・六メートルの堂山、西の麓に水手洗神社のある中山、南北朝時代に活躍した武士、人見四郎の墓跡の碑がある前山の三つである。

この浅間山には、平成十七年に「関東富士見百景」に選ばれた場所があり、空気の澄み切った晩秋から冬にかけての晴れた日には、富士山をはっきりと見ることができる。真っ白に雪化粧した富士山の姿は、日の出直後に薄いピンクに染まり、日没直後は黄色に浮きあがり感動的である。さらに、なんといっても富士山頂に太陽が沈む瞬間のダイヤモンド富士は、見た人から歓声が上がるほどである。

近所の人は、ウォーキングやジョギング、散歩、子供の遊び場として、生活の一部として親しんでいる。つまり、浅間山は、名所の一つだけでなく、府中市民の生活にとって貴重な存在でもある。

浅間山から歩いて十分のところに住む健太と康太の兄弟は、この山をとても気に入っている。中学一年生の健太は学校のサッカー部に、小学五年生の康太は地域のサッカーチームに所属しているので、夏休みには、毎朝、浅間神社まで登って、その後は前山に向かい、富士山を見て帰ってくるのが二人のトレーニングコースとなっていた。

ある夏の朝、二人がいつものように家を出発し、堂山の麓の鳥居の前に着くと、クヌギやコナラ、アカマツなどが二人を迎えてくれた。ここまで来ると、一気に周囲の雰囲気が変わるのを感じることができる。

頂上に着くと、浅間神社が二人を迎えてくれた。二人は、目を閉じて深呼吸をした。

「やっぱりこの頂上で深呼吸すると、気持ちがよくて元気になるよな。」

「そうだね。」

浅間神社の前でひと息ついた二人は、ゆっくりと中山を通って前山に向かった。

きつい上りのトレーニングから一転して、この後はいろいろな生き物との出会いを楽しむひとときである。

昆虫の好きな弟が耳を澄ますと、枯れ葉がガサガサと動く音が聞こえてきた。すかさず枯れ葉をどかし、

「お兄ちゃん、アオオサムシだよ。緑色できれいだよ。」

とさけんだ。そして、今度は兄が弟を呼んだ。

「こっちではすごいことが起きているぞ。」

弟はすかさず駆け寄って、地面に視線を移してみると、そこには大きなミミズにヒラタシデムシが群がっていた。

「なんかミミズがかわいそうだね。」

と、弟が言う。

「これが自然なんだよ。生き物は、いつかは死ぬんだ。今、あちこちで鳴いている蝉だって、違う動物のえさになるんだから。さっき見つけたカブトムシの死がいも角だけになっていたけど、きっと他の動物に食べられたんだ。」

「そうなの。」

弟はびっくりしていた。

「生き物の世界では、草を食べる動物や、木の蜜を吸っている動物は食べられてばかりだと思うでしょ。」

「うん。」

弟は、兄の話に引き込まれた。

「でも、食べられてばかりの動物たちは、草や木を食べてるだろ。」

「そうだね。」

と、弟が兄の言葉にうなずいた。

「草木などの植物だって生き物だよ。それに、植物は水と二酸化炭素を取り入れて、光があれば自分で栄養を作れるんだ。そして、その時には、酸素を体から出しているんだよ。」

と、兄は説明を続けた。

＊「アオオサムシ」
オサムシ科の昆虫。緑色の金属光沢をしている。地上をすばやく歩き回り、ミミズや昆虫を食べる。

＊「ヒラタシデムシ」
体が平たくて、ミミズの死体や動物の糞（ふん）などを食べている。生きているものをおそうようなことはない。

「だから、草木がいっぱいあるところでは気持ちいいんだね。」
と、弟はうれしそうに言った。そんなやりとりをしながら浅間山を下っていくと、浅間山自然保護会の方々が汗だくになって下草を刈っていた。

「おはようございます。」
二人は、一番近くにいたおじさんにあいさつをした。続けて、弟が、
「何でおじさんたちは草を刈っているんですか。」
と、素直な疑問を投げかけると、
「浅間山の自然を豊かに保つためには、手入れが必要なんだ。草が生い茂っているような畑ではおいしい野菜はできないんだ。それと同じように、山も手入れをしないと、どの植物も育ちが悪くなって、枯れてしまうこともあるんだ。」
と説明してくれた。
この説明をしてくれたのは、浅間山自然保護会会長の山田さんで、さらに近くにいた前会長の山内さんが自然保護会の活動について説明してくれた。
「君たちは浅間山を気に入ってくれているようだね。でも、浅間山が今のようにきれいになったのは、おじさんたちの先輩が、二十年以上前に浅間山自然保護会という団体を作って、清掃、巡回、遊歩道の整備、休憩施設の修理などの活動や、自然観察会などの催しを企画して、浅間山を魅力ある山にしようと頑張ってきたからなんだ。」
「そうなんですか。」
と、二人が驚いていると、山内前会長さんはさらに詳しく教えてくれた。
「だけどね。自然保護会の活動のおかげで、浅間山がだんだん魅力ある山になってくると、心ない人が訪れて、野草を持って帰ってしまうという新たな問題も起きたんだ。」
「野草を採ってしまうなんてひどい。」
と、兄が少し強めに言った。

*「ムサシノキスゲ」
ニッコウキスゲの変種で、花は淡い黄色で芳香がある。五月上旬から下旬に咲く。

「他にもいろいろあるんだよ。以前は、四十年近く何も手を加えていない大木もあったから、その根元には日光が届かなくて、野草が育たなかったんだ。そのため、浅間山にしか存在しないムサシノキスゲが絶滅の危機にさらされたんだ。だから、十分な日光が当たるように、この公園を管理している人たちに頼んで、必要な分だけ木を伐採してもらったり、笹の根がはびこると草木がだんだん衰えるので笹刈りをしたりして守ってきたんだ。今では、その努力が実ってムサシノキスゲも復活したんだよ。」
「すごいなあ。」
弟が目を輝かせた。
「おじさんたちの活動は、毎月第二土曜日と第四日曜日の月二回で、全山清掃は春と秋の年二回、自然保護会のメンバーだけでなく、たくさんのボランティアの人たちにも手伝ってもらっているんだ。君たちにも、ぜひ参加してもらいたなあ。」
「わかりました。ぜひ僕たちも参加します。」
力強く兄が答えると、最後に山田会長さんが大切なことを教えてくれた。
「おじさんたちは、生き物の特徴に合わせて、人間が手を入れることの大切さを、浅間山から教えてもらったんだ。だから、浅間山をできるだけ自然に近い状態に保つことを大切にしながら、必要な場所を選んで下草を刈っているんだ。いつまでも、浅間山のすばらしい自然とかかわっていたいなあと願っているんだよ。」
健太と康太の二人の兄弟は、山田会長さんと山内前会長さんのおかげでウキウキした気分で家に帰った。

家に帰ると、父が、
「今日は何かいいことがあったみたいだね。」
と、声をかけた。二人は、今日体験した浅間山の魅力について話し始めた。
「ムサシノキスゲって、浅間山にしか咲いてないんだって。」
と、まず弟が得意気に言った。
「でも、そのムサシノキスゲだって絶滅しそうな時期があったけど、復活したんだって。」

と、兄も興奮気味に言った。二人の話が終わると、今度は父が静かに言った。
「人間は、自然の中で生きているんだ。この町に住む人たちにとって、浅間山はやっぱりオアシスなんだよ。」
この日は、父の言葉が二人の心にスッとしみ込んでいった。
「浅間山の自然をいつまでも残していきたいね。」
健太が言った。
「僕たち頑張らないとね。」
康太も続けた。浅間山のすばらしさを改めて実感した二人だった。

（篠塚　浩幸　作）

花火大会　（多摩市）

わたしは直子、この四月に中学生になった。中学校ではバスケットボール部に所属し、毎日楽しく活動している。

入学して三か月たったある日、わたしは渡り廊下で「チョボラのある学校にしよう！」と大きな字で書かれた生徒会のポスターを見つけた。気をつけて見ると、校舎のあちこちにはられている生徒会ポスターにも「チョボラ」という言葉が書かれていた。

「チョボラってなんですか？」

放課後、職員室に行ったときに担任の先生にたずねてみた。

「『ちょっとしたボランティア』を省略した言葉だよ。うちの学校は、ボランティア活動が盛んなんだ。」

そう言いながら、先生が地域のミニコミ紙の記事の切り抜きを見せてくれた。

「これは、去年の記事だよ。『せいせき多摩川花火大会』の翌日の清掃活動に、うちの学校の生徒が三十三名参加したんだ。朝六時半から地域の人と一緒にゴミ拾いをしたんだよ。今年も募集するから、直子さんもどうかな？」

わたしは、今までボランティアをやりたいと思ったことは一度もなかったし、突然のことだったので、

「考えておきます。」

と、小さく答えた。花火大会後の清掃活動なんて、ゴミがいっぱいで大変そう。おまけに朝早くなんて冗談じゃないと、後でそんな気持ちになった。

その日の放課後、バスケットボール部の先輩が、花火大会後の清掃活動の話をしていた。キャプテンの裕二先輩や、智子先輩、麻起子先輩も去年参加したというのだ。わたしはボランティア活動には興味がなかったので、あこがれの先輩たちが皆参加したということに驚いた。だから思わず、

「清掃活動のために早起きしたんですか？　ゴミは臭くなかったですか？」

とたずねてしまった。すると、裕二先輩は笑顔で答えてくれた。

「オレもね、最初はそう思ってた。無理やり友だちに誘われてさ。正直、面倒くさいと思っていたんだよ。ミニコミ紙の取材がくるとか、ジュースがもらえるとか、けっこう不純な動機で参加したんだ……。でも、思い切って参加してよかったよ。」

＊「ミニコミ紙」　地域限定などで発行される新聞。

＊「せいせき多摩川花火大会」　多摩市の多摩川周辺で行われる花火大会。約二十三万人の人でにぎわうという。

智子先輩もうなずきながら答えてくれた。
「わたしも同じようなものよ。ボランティア活動でも友だちと一緒なら楽しめるかなと思って。当日が近づくにつれて、いよいよ明日だなぁ、がんばっちゃおうかな、と思ったの。」
裕二先輩や智子先輩は一学年先輩だけれど、自分よりずっと大人に感じた。先輩たちがかっこよく思え、わたしの心は揺れた。その時、麻起子先輩から、
「一緒にやらない？」
と、声をかけられたわたしは思わず、
「はい。」
と答えていた。

花火大会当日の八月五日、いつもは自宅近くから花火を見ていたが、今年は多摩川の河川敷にある会場で見ることにした。会場は多くの人でごった返していた。夜七時半、最初の花火が打ち上げられた。会場で見る花火は想像以上に迫力があった。ドーン、ドーンと腹に響くような音。頭上からキラキラ星が落ちてくるような感覚。暑い夜空を吹き飛ばしてくれるようだった。わたしは花火に酔いしれた。
時間はあっという間に過ぎ、帰る途中、
「ゴミをお持ち帰りください。」
と、呼びかける人の声が聞こえた。ポイ捨てされたタバコの吸いがらから煙が上がっていた。翌朝、わたしはここでゴミ拾いをするのだ……。そう考えると、少し不安になった。

翌朝の六時半、駅前広場に中学生とその保護者をはじめ、商店会、自治会、市役所、老人会、市民団体など、多くの人が集まった。先輩たちの姿も見えた。

いくつかのグループになり、いろいろなルートに分かれて、駅から花火大会の会場に向かってゴミ拾いを開始するということだった。中学生は五人ずつ各グループに入った。わたしは自治会長をしている渡辺さんのグループに入った。渡辺さんが自分のグループの人たちに呼びかけた。

「花火大会の会場までこのグループで行動します。今日は初めて参加する中学生もいます。皆で急がず休みながらゆっくりやりましょう。中学生の皆さんは、聞きたいことや困ったことがあったら、遠慮なく言ってください。」

わたしは、渡辺さんの言葉を聞いてほっとした。朝早くて眠たいし、ずっとゴミを拾い続けることができるか自信がなかったからだ。全員に集めたゴミを入れる袋と軍手が配布され、清掃活動が始まった。

「えー、何これ。缶の中に飲み残しのジュースがまだ入ってる。きたなーい。」

「こっちなんて、紙袋の中にゴミがいっぱい入ってる。なんで持ち帰らないのかなぁ！」

中学生は大騒ぎしながら活動していた。

「これでも年々来場者のマナーがよくなっているんだよ。数年前はゴミを置いて帰る人がもっと多かったんだ。」と、渡辺さんが教えてくれた。

「これでもよくなったんですか……。」

わたしはこれでマナーがよくなった状態なら、以前は本当に大変だっただろうと思いをめぐらせた。

「この花火大会はボランティアの実行委員で運営されているんだよ。」

「えっ、そうだったんですか。」

わたしは花火大会の運営がボランティアということに驚いた。

「花火大会実行委員会で、どうしたら花火大会が成功するのかを毎年話し合っているんだよ。ゴミ問題一つについても、なんとかしようと話し合った結果、ゴミの持ち帰りを呼びかけることにしたんだ。そうしたら、とても効果があったんだよ。」

「昨日の花火大会で、ゴミ持ち帰りのアナウンスを聞きました。他にも何か問題があるのですか？」

わたしは続けて質問した。

「やはり、安全面のことかな。花火大会をやると問題になるのが場所取りのことなんだ。いい場所を取るために、何日も前からシートを敷いたり、泊まったりする人がいて、トラブルがあったんだ。そこで思い切って場所取りを

禁止にしたんだよ。」
「当日は午後三時半以降じゃないと、花火大会の会場に入れないんですよね。」
と、わたしは答えた。
「そう、それを実行した初めての年は、苦情がいっぱいきた。」
渡辺さんは苦笑して続けた。
「でも、それが、すんなり収まっちゃったんだよ。」
「なんでですか？」
わたしはその理由を知りたいと思った。
「実行委員が自分たちと同じ市民だと分かったからかな。」
「え、どういうことですか？」
わたしはさらに聞いた。すると、渡辺さんは、
「すばらしい花火大会にしようとボランティア活動をする人たちに、苦情なんて言えないんだよ。」
わたしは少し分かったような気がした。
わたしは周囲の人たちと話したり、休んだりしながらゴミを拾い続けた。途中、通りがかりの人に、
「ありがとう。とても助かるわ。」
と、声をかけられた。花火大会の会場近くにたどりついたときには、ゴミ袋はいっぱいになっていて、その重さで手がだるくなった。マナーがよくなってきているとはいえ、楽な活動ではなかった。
「何でこんなことしなきゃいけないの。」
他の中学生も疲れてきたのか、不満も出始めた。
「あと少しで会場だぞ。頑張ろう！」
だれかが励ましの声をかけてくれた。後ろを振り返るときれいになっているのが見えた。花火大会の後、会場周辺がいつもきれいになっているのは、陰で支えている多くの人々の活動があったからなのだと気付いた。
午前九時前には花火大会の会場となった河川敷で全員が合流した。参加者に飲み物が配布されたので、わたしは

先輩や友だちと一緒に、多摩川の土手に座ってジュースを飲んだ。明るい日差しが川面に反射して、キラキラ輝(かがや)いていた。川から吹いてくるさわやかな風をほおに感じ、疲労感と充実感(じゅうじつかん)がとても心地よかった。

この清掃活動に参加してよかったとわたしは心から思った。この活動を通して、わたしの中に今までなかった気持ちが芽生えてきた。

帰り道、裕二先輩に話しかけられた。

「参加してよかっただろう？」

「はい！　自分でも驚きました。わたし自身こんな気持ちになるとは思いませんでした。」

わたしは、自分がちょっぴり大人になったような気がした。

（三浦　摩利　作）

第二章　郷土資料の活用

集団の一員としての役割
五の二
野球チ
○○当番
マネ
野球がやりたい
試合練習を
やりたい
どうして？
下手なのか
いやだ
だれかがやらなきゃ
最後まで
チームのために
みんなもがんばれ
チームで中学生に
うまくなって
選手の頭を思い出す
練習がしたい
つらやましい
やらなきゃよかった
後かい
チームのために
最高のチーム

小学校低学年　　内容項目３―(2)

木のおいしゃさん（立川市）

一　ねらい

身のまわりの花や草木に親しみをもち、優しい気持ちで接していこうとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・国営昭和記念公園は、昭和天皇在位五十年を記念し、立川基地跡に開設された公園である。この公園は、一年中、花が咲き、多くの人々を楽しませてくれる。

・台風で傷を負った桜の木と樹木医とのふれあいの話である。傷を負った桜の木の視点をとおして、樹木医の気持ちを想像することができる。植物を育てた体験などにも触れながら、身の回りの花や草木に親しみをもち、優しい心で接する大切さに気付かせ、自然や動植物を大事にしていこうとする気持ちを育てる。

三　指導上の留意点と工夫

・導入では、きれいな花を咲かせる桜の木の写真などを提示する。また、樹木医が木を診断したり治療したりしている写真をを提示することで、資料に対する関心をさらに高めることができる。

・紙芝居やパネルシアター等の資料提示も考えられる。

・桜の木と樹木医の立場で役割演技を行う指導も考えられる。

・生活科で植物を育てた体験を想起させる。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　「桜の木」と「樹木医」の写真を見て、資料に興味をもつ。 ○　この木は何の木か。 ○　この人は何をしているのか。	・写真を提示し「樹木医」という仕事を説明する。
2　資料「木のおいしゃさん」を読んで、話し合う。 (1) 台風でえだが折れてしまった桜の木はどんな気持ちになったか。 ・　痛いよ。だれか助けて。 ・　これからどうなっちゃうんだろう。心細いなあ。	・傷を負った桜の木の不安な気持ちに共感させる。
(2) 木のお医者さんはどんな気持ちで毎日桜の木に会いに来たか。 ・　痛くないかなあ。だいじょうぶかなあ。がんばって。 ・　早く治してあげたい。 ・　優しくしてあげるよ。守ってあげるよ。 ・　早く治ってほしい。早く元気になってほしい。 ・　ぼくがついているからだいじょうぶだよ。	・桜の木が元気になるように、一生懸命に世話をする木のお医者さんの気持ちに共感させる。
(3) にこにこしながら桜の木に走ってきた木のお医者さんの気持ちを考えよう。 ・　とてもきれいな花が咲いたね。 ・　元気になってくれてうれしいよ。	・補助発問で桜の木の気持ちを考えたり、役割演技を行ったりすることで、さらにねらいに迫ることができると考える。
3　自分の生活を振り返って話し合う。 ○　今まで花や草木に優しくしたことはあるか。どんな気持ちから優しくしたのか。	・行為だけでなく、その時の気持ちも併せて想起させる。
4　教師の説話を聞く。	

小学校低学年　　内容項目３―(2)

せせらぎのみち（国立市）

一　ねらい

動植物の愛おしさ、不思議さを感じ、自然を大切にしようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・国分寺崖線は、多摩川が何十万年もかけて削ってできた崖であり、現在は、立川市から国立市、狛江市、世田谷区を通って、大田区まで三十キロメートルにわたっている。東京都環境局では「雑木林のみち」として都内十コースの保全・管理を行っている。本資料では、そのうちの一つである、立川市・国立市にまたがる矢川・青柳コースの「せせらぎのみち」を舞台にしている。現在も、ここには、立川の崖を通って湧き出す水を集めて流れる矢川（二メートルほどの小川）や、武蔵野の雑木林などの豊かな自然が残っている。

・本資料は、どんぐりとざりがにが、林と川の互いの世界の様子を聞き、その素晴らしさに心躍らせる話である。それを話し合う子供の心にも自然を愛おしいと思う心情を育てていきたい。

三　指導上の留意点と工夫

・生命をはぐくむ太陽や、切り株から芽吹いてくる植物の不思議さ、豊かな自然の中で生きる様々な生物に、子供が心を躍らせ、自然を大切と感じる心情を育てたい。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　せせらぎのみちへのイメージをふくらませる。 ○　せせらぎのみちの小川にはどんな生き物がいると思うか。	・木、ドングリ、小川、ざりがに等、切り絵を貼っていき、黒板全体を散歩みちに見立て、資料への関心を高める。
2　資料「せせらぎのみち」を読んで、話し合う。 (1) 自分の知らない世界の話を聞き、どんぐりとざりがにはそれぞれどんなことを思ったか。 ・　どんぐり…きれいな水だな。湧いてくるなんて不思議だな。生き物がたくさんいて楽しい。水の中も楽しいな。 ・　ざりがに…色づいた林を見てみたいな。ぼくみたいにすごいはさみをもった生き物はいるのかな。	・知らない世界に興味をもつどんぐりとざりがにの気持ちは、子供の気持ちと重なっていると考えられるので、多様な思いを出させる。
(2) 素敵なことがどんなことかわからなくても、二人がにこにこと肩を寄せ合っていたのはどんな気持ちだったからか。 ・　いいことが起こると思うとうれしいな。ワクワクするな。 ・　のんびりしたいい時間だな。お日様があたたかい。 ・　知らない世界はきっと素敵なんだろうな。	・豊かな自然の良さを深く感じるどんぐりとざりがにの気持ちを考えさせる。
(3) 切り株から赤ちゃん枝が出てきたとき、三人はどんな気持ちになると思うか。 ・　また芽が出てくるなんて、不思議だな。すごいな。 ・　この赤ちゃん枝が大きく育つといいな。	・自然の不思議さ、素晴らしさや、それを慈しむ思いに気付かせる。
3　自分の生活を振り返る。 ○　どんぐりくんやざりがにくんに教えてあげたい、素晴らしい生き物や、素敵な自然を見たことがあるか。	・場面や対象を広げて考えさせる。
4　教師の説話を聞く。	

小学校低学年　　内容項目４―(2)

森のごちそう（三鷹市）

一　ねらい

働くことのよさを感じて、みんなのために働こうとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・井の頭池は、東京都立井の頭恩賜公園の中に位置している。井の頭のわき水は、江戸の町に暮らす人々の貴重な水源だった歴史をもち、現在も都民の憩いの場である。池や周りの森には、鯉、鴨、セミ、アリなど、子供たちをひきつける様々な生き物が暮らしている。

・本資料でねらいとする道徳的価値は、今回の学習指導要領の改訂で低学年に新たに設けられた項目であるため、十分な活用を図っていきたい。

三　指導上の留意点と工夫

・「ふうちゃん」がよくて、「よっちゃん」が悪いという対立的な扱い方はしない。働くことの素晴らしさに気付いていく「よっちゃん」の気持ちの変化に、児童の気持ちを重ね合わせて考えさせたい。

・大変な仕事でも、人のために働くよさについて考えさせることが大切である。日ごろより、目立たぬ所で、みんなのために活動している児童の様子などを教師が把握しておき、授業の中で紹介するなど、活用することもできる。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　井の頭池と二匹のありの名前を聞き、資料に興味をもつ。 ○　井の頭池を知っているか。	・井の頭池を紹介し、興味・関心をもたせる。
2　資料「森のごちそう」を読んで、話し合う。 (1) どうして「あきれちゃうな、ふうちゃんは。」と思ったか。 ・　働きすぎると、つかれちゃうと思ったから。 ・　自分はなるべく楽をした方がいいと思ったから。 (2) よっちゃんはどんな気持ちで重いビスケットを運んでいたのだろう。 ・　重いな。ふうちゃんは大変だっただろうな。 ・　頑張れば、自分にもいいことがあるかな。 ・　自分の運んだビスケットも、みんなが喜んでくれるかな。 ・　こんなに大変なのに、他人の分まで運んだふうちゃんは、えらかったな。 (3) ブルブルと震える手でビスケットを食べたとき、よっちゃんはどんな気持ちだったか。 ・　おいしい。一生懸命に働くとおいしいな。 ・　疲れたけれど、みんなのために働いて気持ちがいいな。 ・　からす君が言っていた「いいこと」はビスケットの量ではなく、いい気持ちのことだったんだな。	・人より多く働くことが損だと思っているよっちゃんの気持ちに気付かせる。だれもがもつ楽をしたい気持ちに共感させながら次の発問につなげる。 ・ふうちゃんのまねをしたよっちゃんの気持ちを考えさせる。 ・ふうちゃんが、自分のためだけでなく、人のために働いていたことに気付かせる。 ・ビスケットの味が、昨日とは全く違っていたことに注目させ、損得勘定なく一生懸命に働く気持ちよさに気付かせる。
3　自分の生活を振り返る。 ○　みんなのために働いて、気持ちがよかったことはあるか。	・ワークシートを用意する。 ・担任が把握している児童の良さなどを紹介する。
4　教師の説話を聞く。	

小学校低学年　　内容項目４―(5)

へびさん　よろしく（清瀬市）

一　ねらい

郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心情を育てる。

二　資料選定の理由

・子供たちが生活する各地域では、様々な行事が行われており、それぞれの行事にはその地域の人々の様々な思いが込められている。

・本資料では、清瀬市の下宿に伝わる「ふせぎ」の行事を取り上げている。「ふせぎ」には、地域の人々の安全・健康の祈りが込められている。自分たちの地域にも、様々な行事が行われており、どの行事にも人々の様々な思いが込められていることを知り、郷土の伝統や文化を大切にしようとする心情を育てる。

三　指導上の留意点と工夫

・写真等の資料を準備して、資料の理解を助ける。

・自分たちの身近にあったり昔から伝わったりしている行事を調べさせるなど、生活科の「地域」の単元との関連を図ることもできる。

・登場人物の「ぼく」に、児童が自分たちの町のことを知らせて自慢することをとおして、学習意欲を高める。

・写真は、清瀬市のホームページより使用した。

四　展開例

学習活動	指導上の留意点
1　「ふせぎ」のへびの写真を見て何か考える。	・ふせぎの写真を用意して、資料に興味・関心をもたせる。
2　資料「へびさん　よろしく」を読んで、話し合う。 (1) どんな気持ちで「へびさん、よろしく」と心の中で言ったのか。 ・　いつも町を守ってくれてありがとう。 ・　みんなが病気にならないといいな。	・「ふせぎ」の活動をしている様子の写真を見せて人々の動きを分からせる。
(2) おじいちゃんをじっと見つめているとき、「ぼく」はどんなことを考えていたか。 ・　たいへんだなあ。 ・　あせびっしょりだ。 ・　わらであんなに大きなへびを作るなんて、すごいな。	・大勢の人が一緒に取り組んでいる写真を見せて、考えさせる。
(3) 「ぼく」の町を自慢する気持ちを、「ぼく」になったつもりで言ってみよう。 ・　みんなで力を合わせて、大きなへびを作るんだよ。 ・　みんなで、みんなの幸せを考えているからへびを作るんだ。	・身振り手振りを入れ、自慢している主人公の気持ちに共感させて発言させる。
3　自分たちの生活を振り返って話し合う。 ○　自分たちが住んでいる地域に、昔からあるものにはどんなものがあるだろう。主人公の「ぼく」に自慢しよう。	・身近にあったり、昔から伝わったりしている行事について考えさせる。 ・手紙形式で自分たちのことを知らせる。
4　教師の説話を聞く。	

小学校中学年　　内容項目２―(2)

むかしむかし柿の木坂で（目黒区）

一　ねらい

相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・本資料は、目黒区教育委員会が編集し、区内の小学校三・四年生に配布している道徳郷土資料副読本「めぐろの心」が出典である。

・目黒区内にある柿の木坂は、現在も地名として残っている。現在では、住宅地が広がり、大きな幹線道路が通るこの土地が、昔は田園風景であった。

・困り果てたおじいさんに対する、子供たちの思いやりの心がにじみ出ていて、温かな人の心のつながりが感じ取れる資料である。

三　指導上の留意点と工夫

・各発問で、おじいさんの気持ちに共感できるように工夫する。「いたかった手足のいたみも、すうっとぬけていくような気がして……。」に着目した補助発問を用意しておき、人の心の温かさがどのような力をもつのか考えを深めさせたい。

・話の内容が理解できるように、大八車や荷車等、児童になじみのうすい物は、導入で触れておく。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　目黒の柿の木坂での昔話であることを知り、資料へ興味をもつ。 ○　柿の木坂は目黒区にあることを知っているか。	・大八車など、聞き慣れない言葉を補足し、昔話の世界への導入を図る。
2　資料「むかしむかし　柿の木坂で」を読んで、話し合う。 (1) 荷車に柿を積み込んでいるときのおじいさんは、どんなことを考えていたか。 ・　たくさん売れるといいな。がんばろう。 ・　重たいな。大丈夫かな。	・収穫した作物を売りに行く喜びや、仕事の大変さなど多様な思いを考えさせる。
(2) めったに泣かないおじいさんが、涙をボロボロ流したのは、どんな気持ちだったからか。 ・　せっかく実った柿が台無しになってしまった。 ・　痛くて、悲しくてたまらない。 ・　売り物の柿がこんなになってしまってどうしたらいいのか分からない。	・困り果てて泣いているおじいさんの気持ちがわかってこそ、親切な行動につながるため、十分に共感させる。
(3) 手ぬぐいに目を当てて何度も何度もお礼を言っているおじいさんは、どんなことを思っていたか。 ・　なんてやさしい子供たちなのだろう。心は温かいな。 ・　助けてもらってうれしい。 ・　体の傷も痛くなくなるなんて、人の優しさってすごい力をもっているのだな。	・感謝の気持ちだけでなく「痛みも消えた」ことに着目させ、困っているときに親切にされた側は、心が温かく癒されるものであることを感じさせ、ねらいとする道徳的価値について考えさせる。
3　自分の生活を振り返る。 ○　茂平や与作のように、相手の気持ちを考えて親切にしたことはあるか。	・場面や対象を広げてから考えさせる。
4　教師の説話を聞く。	

内藤新宿（新宿区）

一　ねらい

郷土に愛着をもち、郷土を大切にしていこうとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・新宿は、日本を代表する繁華街・オフィス街の一つであることで有名である。この新宿の名称は、かつての甲州街道の宿場町「内藤新宿」に由来している。江戸時代、起点である日本橋から最初の宿場である高井戸までの距離が長いため、一六九八年、この地に新しい宿場が設けられた。当時の信州高遠（たかとお）藩主であった内藤氏の屋敷があったため、内藤新宿と称した。

・新宿の町の成り立ちを知るとともに、苦労する人々への優しい思いを感じ取れる資料である。この資料をとおして郷土への興味・関心を高めさせ、郷土を大切にしようとする心情を育てたい。

三　指導上の留意点と工夫

・導入では、高層ビル群や夜景の写真を提示したり、簡単な東京の地図を活用したりして、資料への興味・関心を高める。

・自分を振り返る場面では、地域に貢献している人を想起させる。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　新宿の町の現在の様子を知る。 ○　新宿はどんな町ですか。	・町の様子が分かる写真を用意する。新宿に行ったことがある児童がいた場合、その様子を聞く。
2　資料「内藤新宿」を読んで、話し合う。 (1) 苦しそうなお年寄りを見たとき、喜六はどう思ったか。 ・　だいじょうぶかな。 ・　早くよくなってほしい。 (2) 助けられて元気になったお年寄りの話を聞いて、喜六はどう思ったか。 ・　元気になって本当によかった。 ・　こんなお年寄りが長い道のりを歩くのは大変だ。 ・　きっと多くの人が困っているんだろうな。 (3) 喜六はどんな気持ちで新しい宿場をつくったのか。 ・　もう倒れる人がいないようにしたい。 ・　高井戸まで行かなくても泊まれる所があればみんな助かるだろう。 ・　みんなが喜んでくれるいい町にしたい。	・旅人を思いやる喜六の気持ちをおさえる。 ・日本橋・八王子・高井戸・新宿の位置関係がわかるように、発問の際に簡単な東京の地図を提示して、理解を助ける。 ・困っている人を助けてあげたいという喜六の気持ちに共感させる。
3　自分の生活を振り返って話し合う。 ○　自分たちが住んでいる地域で、喜六のように努力している人、がんばっている人を知っているか。	・昔の人にこだわらず、現在、活躍している人も想起させる。
4　地域の方の話を聞く。	・地域の方を招いて、郷土への思いを話していただく。

練馬の名産品（練馬区）

一　ねらい

郷土のよさを見つけ、郷土を大切にしようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・練馬大根は、昭和三十年代まで全国に出荷されるなど、その名が広まっていた。その後、食生活の変化や病害の影響でほとんど生産されなくなり、一部の農家で、細々と作られ続けている。練馬といえば大根、というほど有名な名産物に対する郷土の人の誇りを考えさせることで、それぞれの郷土への愛着をもたせたい。

・中学年では、社会科の学習で地域を取り扱うこともあり、興味の対象が地域に広がっているところをとらえ、郷土のよさを見つけ、大切にする心情を育てるとともに、自分たちができることを考えさせたい。

三　指導上の留意点と工夫

・導入では、地域の写真を用意するなどして、児童が自分たちの郷土を具体的に想起できるようにする。

・展開では、まゆ子が農園の手伝いをする場面で、自然愛や生命尊重にかかわる発言が出てくることも考えられる。補助発問や問い返しをして、まゆ子の大根に対する関心が意欲につながっていることをおさえたい。

四　展開例

学習活動	指導上の留意点
1　自分が住んでいる地域の写真などを見ながら、思ったこと、考えたことを発表する。	・自分たちの住んでいる地域に関心をもち、そのよさに気付くことができるようにする。
2　資料「練馬の名産品」を読んで、話し合う。 (1) お父さんに「練馬大根を作ってみようか。」と誘われたとき、まゆ子はどんな気持ちだったか。 ・　なんで「練馬」ってついているんだろう。 ・　スーパーで売っている大根でいいのに。 (2) 自分でぬいた練馬大根を見ながら、まゆ子はどんなことを思ったか。 ・　大きいなあ。りっぱだなあ。大きく育ってうれしいなあ。 ・　昔の人もこんなにたいへんだったのかなあ。 (3) まゆ子は友達にどんなことを話すのだろうか。 ・　練馬大根を作るのは大変だけど、農家の人たちはがんばっているんだよ。 ・　学校でも作れたらいいね。 3　自分の生活を振り返って話し合う。 ○　自分たちの地域のよさを大切にするためには、どんなことができるだろう。 ・　自分から色々なところに行ったり、見てみたりする。 ・　この地域に今あるものを大切にする。 ・　役所の人や地域の人たちに話をきく。	・自分の住んでいる地域のことでも知らないことが多いことに気付かせる。 ・育ててきた喜びや地元の名産品を初めて見た気持ちだけでなく、名産品を守ろうとする人々とその努力についても考えさせたい。 ・主人公の地域への興味・関心や、地元のものを大切にしたいという気持ちの高まりをおさえる。 ・導入で出されたことを振り返り、さらに広げて、自分の思いを出させる。 ・自分たちの地域のよさを知り、大切にするためにできることを考えることで、自分から地域の人々や行事に積極的にかかわろうとする意欲を育てたい。
4　教師の説話を聞く。	

わき水の町　東久留米（東久留米市）

一　ねらい

郷土に親しみ、郷土を大切にしようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・南沢湧水群は、東京都の緑地保全地域に指定されるとともに、東京都で唯一、環境省の「平成の名水百選」にも選ばれている。都内では最大量の湧水量である。郷土の自然のよさを知り、大切にしていきたい、と思うみな子の気持ちをとおして、児童に自分たちの地域を考えさせることが期待できる。

・中学年では、児童の行動範囲が広くなり、地域での活動も活発になってくる。自分の住んでいる地域を再認識させ、自然や文化、伝統のよさに気付かせ、それを守り続けることに積極的にかかわっていこうとする心情を育てていきたい。

三　指導上の留意点と工夫

・導入では、写真を用意するなどして、児童が、わき水を初めて見たみな子に共感しやすいようにする。

・展開では、自分たちの地域のことをじっくりと考えさせるために、ワークシートを利用することも考えられる。地域のために児童がすでに行っていることだけでなく、これからやっていきたいと思う意欲も大切にしたい。

四　展開例

学習活動	指導上の留意点
1　きれいな水の流れの写真を見て、感じたことを発表する。	・写真を利用して、資料の登場人物に共感しやすくする。
2　資料「わき水の町　東久留米」を読んで、話し合う。 (1) おじいちゃんから南沢のわき水の話を聞いたとき、みな子はどんなことを考えたか。 ・　わき水なんてすごいな。友だちにも教えてあげたい。 ・　こんなすごいところが自分の住んでいる町にあるんだ。 (2) 実際に水をさわったみな子は、どんな気持ちになったか。 ・　気持ちがいい。きれいな川でうれしい。 ・　こんなきれいな川が、自分たちの町にあってよかった。 (3) 川のまわりを見たり、おじいちゃんに市民の取組などを聞いたりしてからもう一度水をすくったみな子は、どんなことを考えてにっこりとしたのだろう。 ・　みんなが大事にしているからきれいなんだな。 ・　わたしたちも汚さないように気を付けていこう。 3　自分の生活を振り返って話し合う。 ○　自分たちの地域のよさや自慢したいことは何か。また、大切にするためにやっていること、これからやりたいことはあるか。 ・　大きな公園がある。ボランティア清掃でゴミ拾いをした。 ・　お祭りがたくさんある。山車をひくのに参加した。	・みな子の驚きと喜びに共感できるようにする。 ・もう一度本文を読み、両手でそっと水をすくったみな子の行為に着目させるようにする。 ・郷土のものを大切にしたいという気持ちや自分も大切にしていこうという意欲の高まりをおさえる。 ・自然に限らず、文化や伝統にも広げられるようにしたい。 ・自分たちの地域のよさを大切にするためには、自分から地域の人々や行事に積極的にかかわることが大切であることを考えさせたい。
4　教師の説話を聞く。	

小学校中学年　　内容項目４―(6)

日本の国ぎ（港区）

一　ねらい

我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心情を育てる。

二　資料選定の理由

・日本の相撲は、伝統と格式を重んじた国技であるといわれている。本資料では、歴史的に有名な力士についてふれながら、相撲への関心を高めることをとおして、わが国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心情を育てたい。

・世界に貢献する者として自らの国や郷土の伝統・文化についての理解を深め、それらを尊重する態度を身に付けることは重要である。

三　指導上の留意点と工夫

・実際の大相撲の場面をＶＴＲにとり、導入で活用し、資料への関心を高めることができる。また、資料中の、主人公が相撲の様子を思い浮かべる場面でも、それに関連付けて活用することができる。

・相撲についての資料として、財団法人日本相撲協会のインターネットサイト等が利用できる。

四　展開例

学習活動	指導上の留意点
1　大相撲のＶＴＲを見て、話し合う ○　すもうをテレビで見たり、実際に見に行ったりしたことはあるか。	・大相撲のＶＴＲを用意する。
2　資料「日本の国ぎ」を読んで、話し合う。 (1) おじいちゃんから力士のお墓があるんだよと言われたとき、たくやはどんな気持ちだったか。 ・　力士のお墓があるなんて知らなかった。 ・　どんな力士だったのかな。 (2) おじいちゃんから「雷電」についての話をきいたとき、たくやはどんなことを思ったか。 ・　雷電はとても強かったんだね。すごいなあ。 ・　雷電はみんなに人気があったんだね。 (3) たくやは、どんな気持ちで相撲のことを調べるだろうか。 ・　すもうって、おもしろそうだな。 ・　こんなにもすごい相撲のことを調べて、みんなに教えたいな。 3　日本の伝統や文化について話し合う。 ○　日本らしいものや行事の中で、どんなものが好きか。なぜ好きなのか。	・「力士」などの言葉について説明をしておく。 ・当時の相撲の最高位は大関で、現在の「横綱」は無かったことを、児童の実態に応じて伝える。 ・昔から相撲は人々に愛されてきたことをおさえる。 ・発問(1)(2)を踏まえ、相撲に対して興味・関心が高まってきたたくやに十分に共感させる。 ・どんなところが好きなのかなど、発表させる。
4　教師の説話を聞く。	・日本の伝統と文化に関する話をする。

小学校高学年　　内容項目３―(2)

オオタカのすむ里（町田市）

一　ねらい

自然の偉大さを知り、自然環境を大切にしようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・多摩丘陵で多く見られる林は、人が手を入れて維持してきた「雑木林」であったが、現在では、維持が難しくなってきた。また、川の流れに刻まれる丘陵は多くの「谷戸」をつくりだし、その谷底には、「谷戸田」といわれる田んぼがあった。しかし、これらも急速に消えつつある。

・本資料では、町田市北部に広がる東京都指定の図師小野路歴史環境保全地域で、地元農家で構成される組合が、昔ながらの手法を用いて管理し、多様な生き物を守っている様子をとおして、人々の生活とともにある自然の偉大さとその自然を保護することの大切さについて考えさせることができる。

三　指導上の留意点と工夫

・導入では、オオタカの写真を提示し、資料への興味をもたせるのもよい。

・自分を振り返る活動では、時間を十分とり、ワークシートに書かせることも有効である。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　自然っていいなと思った経験について話し合う。 ○　自然っていいなと思ったことはあるか。	・ねらいとする道徳的価値への方向付けをする。
2　資料「オオタカのすむ里」を読んで、話し合う。 (1) ドジョウをつかまえようとして先生に注意されたとき、ぼくはどんな気持ちだったか。 ・　何で逃がさなくてはいけないんだ。 ・　せっかくつかまえたのに残念だな。	・とってはいけない生き物とは知らずに、とってしまった「ぼく」の気持ちに共感させる。
(2) 「ドキッとした」ときの「ぼく」の気持ちはどんなだったか。 ・　ドジョウをとろうとしてしまったことは恥ずかしいな。 ・　自分のしたことはいけなかったな。 ・　オオタカに何かする人がいるかもしれない。そんなことにならないようにしないと。	・生き物を大切にできなかった「ぼく」の気持ちや、生き物を守っていこうとする気持ちに共感させる。
(3) 大きな羽を広げ空を舞うオオタカの姿を見ながら、ぼくはどんなことを考えたか。 ・　オオタカがいるこの自然を大事にしていきたい。 ・　いつまでも、この自然が残っていてほしい。 ・　自分も何かできることをやっていきたい。	・自然環境を守るための多様な感じ方や考え方を引き出せるようにする。
3　自分の生活を振り返る。 ○　今までに自然を大切にしたり、大切にできなかったりしたことはあるか。	・今までの自分自身を振り返り、自然を大切にできた自分やできなかった自分に気付かせる。
4　教師の説話を聞く。	

小学校高学年　　内容項目４―(3)

おもうわよ（青ヶ島村）

一　ねらい

身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たそうとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・青ヶ島村立青ヶ島小学校・中学校では、全校の児童・生徒数が少ないため、学校で行われる行事のほとんどが小学校・中学校合同で行われている。そのため、中学三年生は様々な行事で学校の中心となって活躍する。このような中学生の様子を見ながら、小学生も学年が上がるにしたがって、段々と意識が変わっていく。このことをとおして、身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たそうとする心情を育てたい。

三　指導上の留意点と工夫

・青ヶ島の写真を準備して、資料の理解を助ける。

・主人公の姉に対する気持ちや決意を共感的に考えさせる。

四　展開例

学習活動	指導上の留意点
1　青ヶ島の写真を見て、島について知る。 ○　青ヶ島の環住の歴史を知る。	・青ヶ島の環住の歴史にふれる。
2　資料「おもうわよ」を読んで、話し合う。 (1) わたしは、姉の学校での様子を思い出して、どんなことを考えたか。 ・　なんでもやってすごいな。 ・　みんなのために頑張っているな。 (2) わたしは、姉のささやいた言葉「父さんや母さんをたのむね。学校のみんなのこともたのむね。」を聞いたとき、どんなことを考えたか。 ・　わかったよ。でも、何すればいいの？ ・　姉さんみたいになれるかな。不安だけどがんばろう。 (3) わたしが「がんばらなきゃ。」と思い直したとき、どんなことを考えたか。 ・　まかせて、安心して。 ・　姉さんのかわりになれるようにがんばらなきゃ。	・姉の役割の大変さ、仕事の多さに気付かせる。 ・姉と主人公の動作化をとおして、姉の気持ちに気付かせるとともに、それに対する主人公の気持ちを考えさせる。 ・姉の言葉に決意する主人公の気持ちに共感させる。
3　自分たちの生活を振り返って話し合う。 ○　自分たちの周りにある自分たちができる仕事にはどんなものがあるか。どのようにかかわってきたか。また、中学校には、どのような仕事があると思うか。	・身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たそうとする心情を育てるようにする。
4　教師の説話を聞く。	

小学校高学年　　内容項目４―(7)

よみがえれ　ふるさと三宅島（三宅村）

一　ねらい

郷土や我が国の文化と伝統を大切にし、先人の努力を知り、郷土を愛する心情を育てる。

二　資料選定の理由

・本資料では、三宅島(雄山)の噴火活動によって全島避難となり、ふるさとを四年半の間離れた島民同士が、心の絆を大切にしながら、帰島を果たす姿が描かれている。さまざまな困難を島民同士が支え合いながら、三宅島の自然や文化、伝統を守り続けてきた強い意志に触れることができる。

三　指導上の留意点と工夫

・写真等の資料を準備して、資料の理解を助ける。
・主人公のふるさとである三宅島に対する心の変化と成長を共感的に考えさせる。
・噴火活動は、三宅島の自然と人間が共存する上で避けることができない問題である。しかし、この困難を乗り越えながら、島に住む人々が助け合い、支え合うことで、ふるさと三宅島を愛する心と絆が強くなってきたことに気付かせたい。また、児童が自分たちの地域にどのようにかかわってきたのか、また、どんな思いをもっているのかを振り返らせたい。
・三宅島の学校のホームページを活用することで、三宅島が豊かによみがえっていることに触れさせたい。

四　展開例

学習活動	指導上の留意点
1　三宅島の噴火の様子を写真やＶＴＲ等で見る。 ○　全島避難の様子を知る。	・当時の三宅島の噴火の様子を見ながら自分の感想をもたせる。
2　資料「よみがえれ　ふるさと三宅島」を読んで、話し合う。 (1) 避難先の学校へ転校して避難生活が始まったとき、「ぼく」はどんな気持ちだったか。 ・　悲しく不安だ。三宅島の家や学校が心配でたまらない。 (2) ６年生として三宅島の学校へ戻ることができたとき、「ぼく」はどんな気持ちだったか。 ・　あきらめないでよかった。帰れてうれしい。 ・　これからの島での生活が不安だ。 (3) 太鼓の練習に参加させてもらいながら、「ぼく」はどんなことを考えていたか。 ・　太鼓をたたくと元気が出てくるようだ。 ・　ぼくも太鼓を守りたい。 (4) 「それが島人魂って言うんだよ。」と父に言ったとき、「ぼく」はどんな気持ちだったか。 ・　ぼくも三宅島の人と島のことを一緒に考えていきたい。 ・　三宅島の自慢は、島人だましい。心の絆だ。 3　自分たちの生活を振り返って話し合う。 ○　自分たちが、地域の中で大切にしてきた自然、文化、人とのつながりや伝統、祭りにはどんなものがあるか。また、自分はどのようにかかわってきたか。	・全島避難の怖さや避難生活の不安をもちながらも、早く帰りたいと思う気持ちを想像できるようにする。 ・長い間帰りたいと願っていたことがやっと現実になった喜びと、島での新しい生活の不安に気付かせる。 ・「ぼく」が三宅島の人々と触れ合う中で、島のことをもっと知りたいと思うように心が変化していくことに気付かせる。 ・三宅島に一層の愛着をもつようになってきた気持ちを、共感的にとらえさせる。 ・三宅島の学校のホームページを見せて、現状を確認させる。 ・それらに対する自分自身の思いやかかわりを振り返らせる。
4　教師の説話を聞く。	

小学校高学年　　内容項目４―(7)

小金井桜（小金井市）

一　ねらい

郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心情を育てる。

二　資料選定の理由

・桜は、日本を代表する花であり、人々に愛されてきた。中でも、小金井桜は、江戸時代には著名な文人達がこぞって花見に訪れたほど、人々に愛されていた。古来より、人々が慣れ親しんできた桜を題材に、その美しさを文芸作品に残した文人の気持ちを考えることで、日本の豊かな自然に親しむ心にふれることができる。このことをとおして、郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心情を育てる。

三　指導上の留意点と工夫

・小金井桜や文芸作品の写真等を準備して資料の理解を助ける。

・小金井市教育委員会発行「名勝小金井桜絵巻」を資料として利用できる。

・歌川広重らが残した文芸作品の美しさに触れさせるとともに、小金井桜を愛した文人たちの気持ちを考えさせたり、日本人独特の自然を愛する心に触れさせたりする。

四　展開例

学習活動	指導上の留意点
1　お花見に行った体験を話し合う。 ○　お花見で桜を見たとき、どんなことを感じましたか。	・満開の桜の様子などの写真があれば、提示して資料への導入とする。
2　資料「小金井桜」を読んで、話し合う。 (1) 家族で花見に行き、「ぼく」はどんな気持ちで桜を見上げたり、お父さんの話を聞いたりしていたのだろうか。 ・　いい気分だな。 ・　桜見と言わないのは、なぜだろう。 ・　江戸時代の人たちも花見を楽しんだのだろうか。	・疑問をもったり、驚いたりする「ぼく」の気持ちに共感させる。
(2) 家に帰り、お父さんから小金井桜についての話を聞きながら、「ぼく」はどんなことを考えただろうか。 ・　小金井桜は、とてもきれいだなあ。 ・　歌川広重の作品はきれいだなあ。 ・　たくさんの人々が桜の美しさを楽しんだのだなあ。	・当時の文人たちの作品の美しさを味わわせるとともに、小金井桜の美しさを文芸作品に残した気持ちについても考えさせる。
(3) お父さんから教えてもらった古木の桜を、「ぼく」はどんな気持ちで見上げていたのだろうか。 ・　昔の人も、ぼくと同じように桜が好きだったのかなあ。 ・　小金井桜のことを自慢できそうだな。 ・　いつまでも小金井桜が絶えないように守っていきたい。	・小金井桜は郷土のよさの一つであり、人々の誇りでもあることに気付かせる。 ・現在でも、小金井桜の保護のために尽力する人々がいることを知らせる。
3　自分の生活を振り返って話し合う。 ○　自分の住んでいる地域のよいところは、どんなところか。	・自分が住む郷土のよさを引き出せるようにする。
4　教師の説話を聞く。	

小学校高学年　　内容項目４―(7)

だるまさん　だるまさん（西多摩郡瑞穂町）

一　ねらい

我が国の伝統や文化に関心をもち、それを大切にしていこうとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・瑞穂町に住むだるま職人とその御家族から取材して、本資料は作られたものである。瑞穂町で作られる「東京だるま」は、瑞穂町近くのだるま市だけでなく、調布市深大寺のだるま市等、東京の様々な市に並ぶ。

・日本人は、健康、家内安全、商売繁盛、合格祈願等を願って、だるま、招き猫、熊手、七福神などの縁起のよいものを大切にしてきた。内野さんのような職人の生き方をとおして、伝統・文化のよさを感じとり、心豊かに生きていく東京の子供たちを育てたい。

三　指導上の留意点と工夫

・自分の生活を振り返る場面では、伝統的に受け継がれている日本らしいよさが他にも様々あることに気付き、そのよさを感じられるように指導する。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　だるまを見た場面や場所を思い出す。 ○　だるまを見たことがあるか。	・だるまやだるまの絵などを提示し、資料への興味を高める。
2　資料「だるまさん　だるまさん」を読んで、話し合う。 (1) カナダでだるまを見たとき、ご主人はどんな気持ちだったか。 ・　こんなところで出会えるとは、思っていなかった。 ・　自分も作っているだるまが、カナダにもありうれしい。 ・　日本の文化が、外国でも喜ばれているなんてうれしい。	・思いもよらず、自分が受け継いでいる日本文化に触れた喜びを考えさせる。
(2) なぜ宝石のような思い出になったのか。 ・　だるまを愛してくれる人がいることを知ったから。 ・　だるまが人の心のよりどころになるものだったから。 ・　父親の仕事の素晴らしさを知り、誇りに思ったから。 ・　初めて家の仕事のよさについて考えたから。	・だるまのよさやだるま作りに携わる素晴らしさに初めて気付き、お客さんと触れ合う喜びを感じる息子さんの気持ちに気付かせる。
(3) 息子さんは、どんな気持ちでだるま作りに打ち込んでいるのだろう。 ・　喜んでくれる人たちのために、心を込めている。 ・　「だるまがほしい」と言われるのはうれしい。 ・　日本の伝統的な文化がこれからも大切にされるといい。	・伝統的な物作りに携わる人の喜びや思いを発問(2) の話し合いをもとに考えさせる。
3　自分の生活を振り返る。 ○　昔から変わらぬ、日本らしいよさや日本人が大切にしている心には、どんなものがあると思うか。	・伝統的に受け継がれている日本の心が他にも様々あることに気付き、そのよさを感じられるようにする。
4　教師の説話を聞く。	

中学校　　内容項目1―(4)

小石川上水をつくった人―大久保藤五郎（文京区）

一　ねらい

理想の実現を目指して、積極的な生き方を追い求める態度を育てる。

二　資料選定の理由

・私たちにとって、現在、水は水道の蛇口をひねれば、豊富に得られ、安心して飲むこともできる。本資料は、身近にある水をとおして先人の生き方に興味・関心をもつことをきっかけにして、目的や目標をもち、よりよく生きようとする姿が描かれている。

・江戸時代の初期に、現在の東京の水道の基となった小石川上水を作り上げた大久保藤五郎の生涯をとおして、生きることの意味や目標について考えさせ、理想の実現を目指して生きることの大切さに気付かせたい。

三　指導上の留意点と工夫

・大久保藤五郎の誠実な生き方を共感的に追求させることによって、「よりよく生きたい」という気持ちを育てることが大切である。

・井の頭池（井の頭公園）からの小石川上水の図や関口大洗堰（江戸川公園内ミニチュア）の写真などを使って、イメージを膨らませるとよい。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　生活の中の水について考える。 ○　水は何に使われているか発表する。	・水が無造作に使われていることに気付かせながら、資料への興味・関心を高める。
2　資料「小石川上水をつくった人」を読んで、話し合う。 (1) 大久保藤五郎は、どのような思いからお菓子を作りあげたのだろう。 ・　好きな菓子づくりに専念したから。 ・　武功以外の生き方を見つけたから。 (2) 大久保藤五郎はどのような気持ちから小石川上水を作りあげることができたのだろうか。 ・　江戸の人たちに清涼な飲料水を飲ませたいという強い思い。 ・　自分は武功では十分な貢献ができないが、上水を作ることで多くの人々の役に立ちたいという願い。 (3) 明雄はどのような気持ちで、「僕にもできることから始めていこう。」と思ったのか。 ・　藤五郎さんみたいに大きなことはできなくても、自分なりにできることがある。	・武士としての働きが十分できなくなった藤五郎の絶望感と武功以外の道を見つけた態度に気付かせる。 ・初めての事業がいかに大変なことであるが、藤五郎がなぜやり抜くことができたか考えさせたい。 ・生徒自身にも理想の実現を目指す生き方の大切さに気付かせる。
3　理想を実現するために必要なことについて考える。 ・　自分のためだけでなく、人の役に立ちたいという気持ち。 ・　自分自身に正直に生きるということ。うそのない生き方を追求すること。	・自らの人生を切り拓いていこうとする積極性と力強さが必要であることを考えさせる。
4　教師の説話を聞く。	・自己の人生を切り拓くことのすばらしさを教師自身の経験を踏まえて話す。

中学校　　内容項目２―(5)

大きさとやさしさ（足立区）

一　ねらい

それぞれの個性や立場を尊重し、互いに学び合おうとする態度を育てる。

二　資料選定の理由

・炎天寺は、足立区六月にある寺で、一〇五六年、源頼義と義家父子が奥州安倍氏征討に勝利した際に建立された。一茶祭りでは、「蝉泣くや六月村の炎天寺」の句を詠んだ俳人小林一茶にちなんで、毎年秋、全国小中学生俳句大会が行われている。

・本資料は、俳句大会に応募した中学生が、自分の自信作が落選し、級友が自分の句のよさを理解してくれていたことをきっかけに、級友の句のよさを理解しようと努める姿が描かれている。

三　指導上の留意点と工夫

・本資料は、一茶祭りに落選した主人公の視点で描かれている。活用に当たっては、主人公の心情を共感的に追求させることによって、「お互いのよさを学び合おう」とする気持ちをふくらませたい。

・「心のノート」を活用し、自分とのかかわりで考えさせる。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　小林一茶の句にふれる。 ○　「やせ蛙 負けるな一茶 ここにあり」の感想を話し合う。	・一茶の句について説明し、資料への導入を図る。
2　資料「大きさとやさしさ」を読んで、話し合う。 (1)　乾物屋のおばさんに村上君の句のことを話しているとき、裕美はどんな気持ちだったのだろうか。 ・　自分の句が選ばれない理不尽さを分かって欲しい。 ・　わたしには、村上君の句のよさが全然分からない。 (2)　村上君に「『秋の陽に』ってきれいだよね。」と言われたとき、どうして裕美は言葉が出なかったのだろうか。 ・　村上君が自分の句をほめてくれたので驚いた。 ・　自分は、村上君の句のよさを考えようともしていなかったのに、村上君は意外にもほめてくれた。 (3)　裕美が自然に笑顔を返すことができたのは、どんな気持ちからだろうか。 ・　村上君の句のよさを、自分なりに伝えることができてほっとしている。 ・　お互いによさを認め合うことができてうれしい。 ・　これからもお互いにいい句を作っていこう。	・村上君の句のよさを分かろうとしない裕美の気持ちを共感的に追求させることによって、学び合う姿勢を忘れがちな自分自身の心に気付かせる。 ・自分の句のよさを村上君が理解してくれているのに驚くとともに、自分と村上君との違いを考え始めた裕美の気持ちに気付かせたい。 ・互いを理解し、認め合い、学ぼうとする気持ちをもつことができた喜びを追求させる。
3　個性や立場を尊重することについて考える。 ○　自身の経験を振り返り気付いたり、なるほどと思ったり、これを生かそうと考えたりしたことがありますか。	・「心のノート」２－（５）該当ページを読んで、自分の思いを記入させる。
4　教師の説話を聞く。	・互いに学び合うことの大切さを教師自らの体験を交えて話す。

中学校　　内容項目3－(2)

浅間山（せんげんやま）の魅力（府中市）

一　ねらい

人間が自然と共に生きていることを理解し、自然を大切にする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・浅間山は、府中市にある標高約八十メートルの山である。市民にとって身近な存在であるが、浅間山に関わる歴史的な事象や、浅間山から見ることができるすばらしい景観などは、あまり知られていない。そこで、浅間山のすばらしさをとおして、美しいものに感動する豊かな心を育てたい。

・人間が生きていけるのは、自然の恩恵を受けているためであることを理解させ、人間の力を超えたものに対する畏敬の念の指導につなげることができる。

三　指導上の留意点と工夫

・身近な自然はただ放置して保たれるのではなく、管理保全に従事する多くの人々の努力によることが大きいことに着目させたい。

・浅間山を知らない生徒や行ったことのない生徒に対しては、身近にある自然を取り上げるようにしたい。

・自然愛護について、自分にもできることを考えさせるとともに、そのことから自然との共生の大切さを考えるきっかけとしたい。

・「豊かな自然」にかかわる視聴覚教材を活用し、生徒のイメージをふくらませる。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　自然について話し合う。 ○「豊かな自然」とはどんなことでしょう。	・自然が豊かな場所を連想させ、本時の学習への導入を図る。
2　資料「浅間山の魅力」を読んで、話し合う。 (1) 健太と康太が深呼吸をして元気になったのは、なぜか。 ・　空気がきれいだから。 ・　浅間山に自然がたくさん残っているから。	・浅間山のよさが十分に想像できるようにする。
(2) 浅間山自然保護会の会長さんたちが言う、浅間山の自然を豊かに保つということはどんなことだろう。 ・　自然のバランスをうまく保つということ。 ・　生き物の特性に合わせて、人間が守り育てること。	・自然界の調和について気付かせる。
(3) お父さんの話が二人の心にスッと入ったのは、なぜか。 ・　人間には、自然が大切だということが分かったから。 ・　改めて浅間山の素晴らしさを感じることができたから。	・二人と同様に自然が素晴らしいという感覚について、十分に共感させたい。
3　人間は自然に対し、どんな思いをもつことが大切かを考える。 ・　自然と共に生きていることを自覚して自然を守っていこうとする思い。 ・　自然の恵みによって人間が生きていることを自覚し、自然を利用するだけではなく共生していこうとする思い。	・自然と共に生きることや、人間は自然の中で生かされていることについて、十分に考えさせたい。
4　教師の説話を聞く。	・自然と共生する大切さを話す。 ・自然の偉大さを感じる視聴覚教材を用いてもよい。

中学校　　内容項目４―(2)

花火大会（多摩市）

一　ねらい

自分が社会の一員であるという自覚を深め、互いに協力し、よりよい社会を実現しようとする態度を育てる。

二　資料選定の理由

・本資料では、主人公の直子が初めて体験するボランティア活動に共感させながら、生徒が自らを振り返り、他の人々との協力やよりよい社会の実現について考えさせたい。

・「せいせき多摩川花火大会」は、ボランティアの実行委員を中心として、多くの市民が協力して行う花火大会である。陰で支える多くの人たちのおかげで花火大会の成功があることに気付かせたい。

三　指導上の留意点と工夫

・中学生になると、ボランティア活動を嫌う気持ちと同時に、よりよい社会の実現を目指して、自分も役に立ちたいという気持ちも芽生えてくる。主人公の気持ちの変化を共感させることによって、よりよい社会の実現を求める態度を養いたい。

・地域社会でボランティア活動などに取り組んでいる方をゲストティーチャーに招いてもよい。

四　展開例

指導の意図・学習活動	指導上の留意点
1　自分たちの地域の行事や自慢できることについて想起する。 ○　住んでいる地域には、どのような行事や自慢できることがあるか。	・キャンプ、バザー、花火大会、映画鑑賞会、どんど焼きなど、生徒から自由な意見がでるようにする。
2　資料「花火大会」を読んで、話し合う。 (1)「先輩たちがかっこよく思え、わたしの心は揺れた。」とあるが、わたしの心が揺れたのはなぜか。 ・大変そうだが自分にもできるかもしれないと思ったから。 ・あこがれの先輩たちが参加してよかったと言うのを聞いて、かっこいいと思ったから。 (2)花火大会がボランティアの実行委員で運営されていると聞いて、直子はどう思ったか。 ・花火大会後に会場周辺がきれいになっていたのは、ボランティアの人たちのおかげだったんだ。 (3)「この活動を通して、わたしの中に今までなかった気持ちが芽生えてきた。」とあるが、それはどのような気持ちか。 ・中学生の自分でも、役に立ててうれしい。これからも地域の活動に参加したい。 ・いろいろな人たちと力を合わせてすることの大切さを学んだ。	・ボランティア活動の意義について表面的には理解しているものの、自発的な行動にまでは至っていないという直子の揺れ動く気持ちを共感させる。 ・この花火大会は、ボランティア一人一人の協力や、周りの人たちの協力で成り立っていることに気付かせる。 ・ボランティア活動を通して、地域の一員としての自覚が芽生え、よりよい社会を実現しようという気持ちになった主人公の気持ちについて考えさせる。
3　よりよい地域社会を実現するために、自分は何ができるかについて考える。 ○　地域のためにどのようなことができるか。また、「ちょっとしたボランティア」ではどのようなことができるか。	・日常生活の中で自分ができることを考えさせたい。
4　教師の説話を聞く。 ○　社会貢献をした経験などについて話す。	・ゲストティーチャーを招いて、考えさせることもよい。

各資料と内容項目との関連

集	学年		視点及び内容項目 / 資料名	1 主として自分自身に関すること						2 主として他の人とのかかわりに関すること						3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること			4 主として集団や社会とのかかわりに関すること									
				(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
第3集（平成二十年度）	小学校低学年	1	木のおいしゃさん														★											
		2	せせらぎのみち														★											
		3	森のごちそう																	★								
		4	へびさん　よろしく																				★					
	小学校中学年	1	むかしむかし柿の木坂で								★																	
		2	内藤新宿																				★					
		3	練馬の名産品																				★					
		4	わき水の町　東久留米																				★					
		5	日本の国ぎ																					★				
	小学校高学年	1	オオタカのすむ里														★											
		2	おもうわよ																		★							
		3	よみがえれ　ふるさと三宅島																						★			
		4	小金井桜																						★			
		5	だるまさん　だるまさん																						★			
	中学校	1	小石川上水をつくった人 ー大久保藤五郎				★																					
		2	大きさとやさしさ											★														
		3	浅間山の魅力														★											
		4	花火大会																	★								

※小学校及び中学校学習指導要領（平成20年3月告示）による

作　成　協　力　者

（職名は平成２１年３月現在）

《 第 ３ 集 》

平成２０年度　道徳授業地区公開講座推進委員会

【小 学 校】

委員長	関　口　純　一	豊島区立さくら小学校校長
委　員	松　野　薫　子	文京区立窪町小学校主幹教諭
	武　田　　淳	中野区立中野神明小学校主幹教諭
	大　野　寿　久	国分寺市立第十小学校主幹教諭
	由　良　　隆	台東区立東泉小学校教諭
	橋　本　ひろみ	世田谷区立松原小学校教諭
	鈴　木　裕　子	町田市立忠生第一小学校教諭

【中 学 校】

委員長	山　田　佳　子	大田区立馬込中学校校長
委　員	坂　口　幸　恵	江戸川区立平井第二小学校校長
	金　子　善　厚	葛飾区立桜道中学校主幹教諭
	小　貝　　宏	江戸川区立松江第五中学校教諭
	三　浦　摩　利	多摩市立多摩中学校教諭
	篠　塚　浩　幸	多摩市立青陵中学校教諭

なお，東京都教育委員会においては，次の者が本書の編集に当たった。

坂　本　和　良	教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課長
臼　倉　美　智	教育庁指導部主任指導主事
建　部　　豊	教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課統括指導主事
井　尻　郁　夫	同　　指 導 主 事
前　田　　元	同　　指 導 主 事
松　永　かおり	同　　指 導 主 事

平成２０年度　東京都道徳教育郷土資料集（第３集）

平成２１年３月１７日
編集・発行　　東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課
所 在 地　　東京都新宿区西新宿２－８－１
電話番号　　（０３）５３２０－６８４１
印刷会社　　前田印刷株式会社

再生紙を使用しています。